

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書 第 32 集

中 崎 遺 跡 II

畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 8

平成 30 年 3 月

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書 第 32 集

な か ざ き い せ き
中 崎 遺 跡 II

畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 8

平成 30 年 3 月

常陸大宮市教育委員会



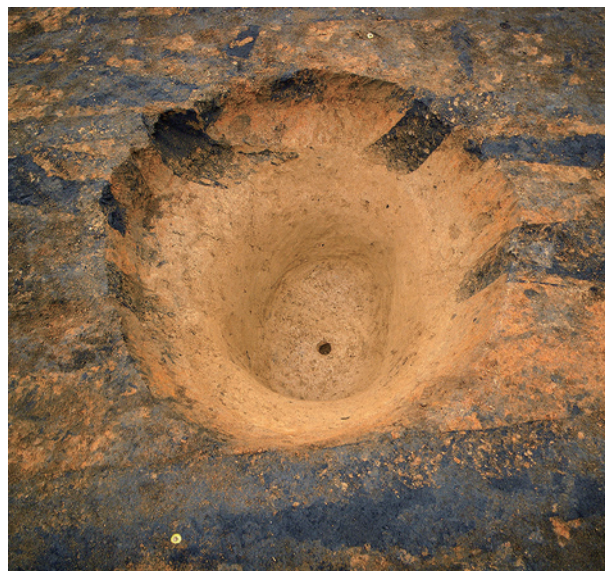
中崎遺跡第2次調査区全景1（南東から・左奥に那珂川を望む）



中崎遺跡第2次調査区全景2（上が北方向）



SK164 土層断面 (東から)



SK164 全景 (南から)



SK172 土層断面 (南から)



SK172 全景 (南から)



SK188 土層断面 (南から)



SK188 全景 (南から)

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県の北西部、県都水戸から約20kmに位置する、平成の大合併で誕生した人口約4万1千人の市です。

市域は、八溝山地の南端と関東平野周縁台地の北端の境界部にあたります。東部には久慈川、南西部には那珂川、中央部には緒川や玉川の清流が流れ、山間には美林が涵養されており、まさに山紫水明の地となっております。また、河川の流域や台地上には肥沃な田畑が広がり、大きな農業生産力の基盤となっております。

こうした豊かな自然に恵まれた常陸大宮市は、古くから人々の生活の場として永い歴史を重ねており、市域には各時期の集落跡をはじめ、古墳・城館跡・塚など多くの遺跡が存在しています。

これらの遺跡は、私たちの祖先がどのように生活したのか、そして現在の豊かな生活の礎がいかに築かれてきたのかを知る手がかりになります。遺跡は、私たちが心豊かな生活をするうえで根源的かつ必要な情報を与えてくれていると言えます。このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な責務であり、郷土の発展のためにも重要なことと考えております。

このたびの発掘調査は、三美地区畑地帯総合整備事業に伴い、周知の遺跡である中崎遺跡の記録保存を目的として行ったものです。この整備事業は広範囲に及ぶもので、すでに三美地区では、平成23年度に赤岩遺跡、平成24年度に赤岩遺跡・三美中道遺跡、平成25年度に滝ノ上遺跡、平成26年度に三美中道遺跡・滝ノ上遺跡、平成27年度に2箇所に分けて滝ノ上遺跡、平成28年度に中崎遺跡を調査しました。今回は、事業全体で第7次発掘調査であり、第2次の中崎遺跡の調査となります。

これらの発掘調査では、那珂川流域にある遺跡の中でも突出して豊富で貴重な資料が出土しており、市の歴史を変える新たな発見が多くありました。

今回の現地調査は平成29年8月7日から平成29年9月15日まで実施し、縄文時代草創期（約13000～9000年前）の陥し穴や、近世以降の遺構・遺物を発見しました。

本書は、この発掘調査の成果を報告するものであります。歴史研究の学術資料としてはもとより、地域の教育・文化の向上のために十分に活用していただくことを希望いたします。また、この機会に文化財愛護の意識を一層高めていただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり御協力いただきました地元の皆様、適正かつ慎重な調査をしていただいた株式会社地域文化財研究所様、その他御指導・御協力をいただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

平成30年3月

茨城県常陸大宮市教育委員会
教育長 上久保 洋一

例 言

1. 本書は、茨城県常陸大宮市三美 895 番地外に所在する中崎遺跡（遺跡番号 08225 大 087）の第 2 次発掘調査報告書である。
2. 調査は、畑地帯総合整備事業三美地区に伴う事前調査として行った。
3. 調査は、常陸大宮市から委託を受けた株式会社地域文化財研究所が、常陸大宮市教育委員会の指導の下に行った。
4. 調査の期間、調査面積、担当者など調査体制は下記の通りである。

調査期間 平成 29 (2017) 年 8 月 7 日 ~ 同年 9 月 15 日

調査面積 772m²

調査担当者 高野浩之

5. 整理調査及び本書の作成は、常陸大宮市教育委員会文化スポーツ課（主幹・中林香澄、嘱託職員・萩野谷悟）の指導の下に高野が行った。
6. 本書の執筆分担は、第 1 章第 1 節を中林が、それ以外を高野が担当した。
7. 本調査に関わる出土遺物及び調査記録（実測図、写真等）の資料は常陸大宮市教育委員会で保管している。
8. 調査においては、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。

（敬称略・順不同）

中崎弘行 川澄道徳 小森勝一 大賀真樹 大津直己 中村信博

茨城県教育委員会 茨城県県北農林事務所 三美地区畑地帯総合整備事業推進協議会

常陸大宮市産業観光部農林振興課

9. 発掘調査及び整理調査の参加者は下記の通りである。

（発掘調査）

石山 匠 市毛祐一 宇留野広大 宇留野初男 宇留野正美 小堤静江 小山義則

角谷秀夫 川崎剛史 齊藤周三 齋藤宏光 佐藤精二 澤島恒則 鈴木潤一

高岡真士 高久照美 高田幸江 高安幸且 野口 守 藤崎勝夫 安井忠一

谷津 敬

（整理調査）

川村理華 木村春代 小林真千子 野村浩史 藤井陽子 増田香理

凡 例

1. 調査において使用した略号は次の通りである。なお、各遺構番号は第1次調査から継続した連番である。

中崎遺跡：MN Z

土坑・陥し穴：SK144～ 井戸跡：SE08～ 溝跡：SD06～

ピット：Pit193～ 風倒木痕：SX01 K：攪乱

S P：七本桜軽石 I S：今市スコリア K P：鹿沼軽石

2. 測量は、国家標準直角座標Ⅹ系（世界測地系）に基づいている。遺構図の方位は座標北を示し、断面図に記載した数値は標高を表している。
3. 遺構の形態及び規模は、基本的に現存している形状で判断した。遺構平面の計測は壁上端を基準とし、深さは検出面から計測したものである。主軸方向は長軸線を軸線とし、座標北に対し東西に何度傾いているかを示した。なお、遺構平面図において耕作によるトレンチャーの攪乱線は乱雑になることを避けるため省略した。
4. 挿図中の土層と、出土遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社）を使用した。土層説明の中で「φ」は粒状径を表し、規模をミリ単位とした。含有量は2%以下を「微量」、3～9%程度を「少量」、10～19%程度を「中量」、20%以上を多量とし、多量のものについては（ ）付で分量を示した。いずれも同書の「面積割合」を参照した。
5. 挿図の縮尺は、遺構平面図・断面図が1/60を基本とし、出土遺物が、陶磁器・土器類を1/3, 1/4, 石器類、銅製品を2/3, 1/3とした。いずれも各図にスケールを示した。写真図版の縮尺は不統一である。
6. 遺構一覧表及び出土遺物観察表の計測値はcm単位で表記している。計測値の中で、（ ）付けがあるものは推定値を、〈 〉付けがあるものは現存値を表す。
7. 掲載遺物には遺構ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版ともに一致させている。
8. 出土遺物集計表中の点数は、接合されたものは1点と数えているが、逆に同一個体であることが明らかであっても接合しないものはそれぞれの破片を1点としている。
9. 挿図中で使用したスクリーントーン及び線種は次の通りである。これ以外のものは各図に示した。

┌──┐ …試掘トレンチ

┌──┐ …攪乱・植栽痕等

■ …攪乱・植栽痕等
(セクション内)

10. 本文中で使用した地図類の内、第1図は『中崎遺跡Ⅰ』から引用した。第2図は国土地理院発行1:25,000地形図「野口」、第3図は常陸大宮市都市計画図1:10,000をもとに、縮尺変更、加筆し使用した。
11. 引用・参考文献は本文の最後に一括して掲載した。

目次

巻頭図版

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 調査の方法と経過…………… 1

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境…………… 3

第2節 歴史的環境…………… 5

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要…………… 7

第2節 基本層序…………… 11

第3節 遺構と遺物…………… 11

1 縄文時代

(1) 陥し穴…………… 11

(2) 土坑・ピット…………… 13

(3) その他…………… 19

2 近世

(1) 井戸跡…………… 20

(2) 溝跡…………… 22

(3) 土坑・ピット…………… 24

3 時期不明遺構

(1) 土坑・ピット…………… 32

4 遺構外出土遺物…………… 34

第4節 総括…………… 36

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 地形図…………… 3

第2図 周辺の遺跡分布図…………… 4

第3図 調査区位置図…………… 7

第4図 遺構全体図(1)…………… 8

第5図 遺構全体図(2)…………… 9

第6図 基本層序…………… 10

第7図 第164号土坑…………… 12

第8図 第172号土坑…………… 12

第9図	第188号土坑	13	第34図	第150号土坑出土遺物	25
第10図	第147号土坑	13	第35図	第150～156号土坑	26
第11図	第165号土坑	14	第36図	第151号土坑出土遺物	26
第12図	第166号土坑	14	第37図	第153号土坑出土遺物	27
第13図	第167号土坑	14	第38図	第156～159号土坑	28
第14図	第168号土坑	15	第39図	第157号土坑出土遺物	28
第15図	第169号土坑	15	第40図	第160号土坑	29
第16図	第170号土坑	16	第41図	第161号土坑	30
第17図	第173号土坑	16	第42図	第162号土坑	30
第18図	第183号土坑	16	第43図	第163号土坑	30
第19図	第184号土坑	17	第44図	第175号土坑	31
第20図	第185号土坑	17	第45図	第181号土坑	31
第21図	第186号土坑	17	第46図	第194～196,198～204号ピット	31
第22図	第187号土坑	18	第47図	第148号土坑	32
第23図	第189号土坑	18	第48図	第174号土坑, 第218号ピット	32
第24図	第190号土坑	18	第49図	第176号土坑	33
第25図	第191号土坑	19	第50図	第177号土坑	33
第26図	第193,197,220号ピット	19	第51図	第178号土坑	33
第27図	風倒木痕	20	第52図	第179号土坑	33
第28図	第8号井戸跡	21	第53図	第180号土坑	33
第29図	第9号井戸跡・出土遺物	21	第54図	第205～217,221号ピット	34
第30図	第6号溝跡	22	第55図	遺構外出土遺物	34
第31図	第6号溝跡出土遺物	23	第56図	縄文時代遺構・風倒木痕配置図	36
第32図	第144～146号土坑	24	第57図	近世生活域・墓域想定図	37
第33図	第149号土坑・出土遺物	25			

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧表	5	表8	第153号土坑出土遺物観察表	27
表2	ピット一覧表(縄文時代)	19	表9	第157号土坑出土遺物観察表	28
表3	第9号井戸跡出土遺物観察表	22	表10	ピット一覧表(近世)	32
表4	第6号溝跡出土遺物観察表	23	表11	ピット一覧表(時期不明)	34
表5	第149号土坑出土遺物観察表	25	表12	遺構外出土遺物観察表	35
表6	第150号土坑出土遺物観察表	25	表13	出土遺物集計表(陶磁器・土器)	35
表7	第151号土坑出土遺物観察表	26	表14	出土遺物集計表(土器以外)	35

写 真 目 次

巻頭図版1	中崎遺跡第2次調査区全景1 中崎遺跡第2次調査区全景2	図版2	SK173全景 / SK183全景 / SK184全景 / SK187全景 / SK189土層断面 / SK189全景 / 風倒木痕土層断面 / 風倒木痕全景
巻頭図版2	SK164土層断面 / SK164全景 / SK172土層断面 / SK172全景 / SK188土層断面 / SK188全景	図版3	5区全景 / SD06全景 / SK144～146・150～156・161・ 162全景 / SE08全景 / SE09全景
図版1	4区全景 / SK165全景 / SK166全景 / SK167全景 / SK169全景	図版4	出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、三美地区畑地帯総合整備事業に伴う事前調査である。

平成21年5月11日、茨城県県北農林事務所から常陸大宮市教育委員会に、同事業予定地内における埋蔵文化財の所在の有無について照会がなされた。事業予定地は面積38haの広範囲に及び、その区域内に6か所もの周知の埋蔵文化財包蔵地を含んでいた。

そのため事業予定地を便宜上3地区に分割して取り扱い、その1地区に対し、平成22年10月から平成23年5月にかけて市教育委員会が試掘調査を実施したところ、縄文、奈良・平安時代の集落が存在することが判明した。これを受け、茨城県県北農林事務所が茨城県教育委員会と協議を行ったところ、発掘調査を実施すべき旨回答を受けた。この区域も発掘調査を行うには広すぎるため、さらに2つに分けて2か年にかけて調査した。まず平成23年度に株式会社日本窯業史研究所に調査を委託し、赤岩遺跡の第1次調査を実施した。続いて平成24年度には株式会社地域文化財研究所に委託し、赤岩遺跡第2次及び三美中道遺跡調査を実施している。

一方、3地区に分割した2地区目に対しては、平成23年6月から平成24年7月に市教育委員会で試掘調査を実施しており、縄文の集落の所在が確認されている。これを受け茨城県教育委員会と協議を行ったところ、同様に発掘調査を実施すべき旨回答があり、本発掘調査を実施する運びとなった。諸々の事情により調査は数回に分割して実施することとなり、まず平成25年度調査は有限会社毛野考古学研究所に委託して実施した。平成26年度には大成エンジニアリング株式会社に委託して実施した。

平成27年度には、前年度調査で残された2地区目（滝ノ上遺跡）の工区を2つに分け、畑地帯総合整備事業の工区を大成エンジニアリング株式会社に、事業に伴う市道整備の工区は株式会社東京航業に委託して実施した。

平成28年度には3地区目（中崎遺跡）の畑地帯総合整備事業の工区を関東文化財振興会株式会社に委託し、発掘調査を行った。

そして平成29年度に、最後に残った3地区目の市道改良部分を株式会社地域文化財研究所に委託し、発掘調査を行った。（中林香澄）

第2節 調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査は、試掘調査の結果に基づき772㎡を対象に行った。調査区は、昨年度に実施された第1次調査の1～3区を引き継ぎ、今回の調査区は4区以降の名称を使用した。さらに現存する道路を挟んで南北に分かれるため、その後の作業や記録等を進めるにあたり、便宜上北側調査区を「4区」、南側調査区を「5区」とした（第3・4図）。発掘作業の内、表土除去はバックホーを用い、その後の遺構確認及び遺構の掘り下げは全て人力で行った。発生土は、耕作土と基盤土に分け、耕作土は事業主体者側から指定された場所へ、基盤土と遺構掘削土は各調査区の脇へ仮置きをした。遺構の掘り下げに際しては、土層を

観察しながら全て半截し、遺構とそうでないものを判別した。記録は、事業計画によって設置された公共座標をもとにX軸 = 60450, Y軸 = 46490の交点を基点とし、5 × 5 mの方眼グリッドを組んだ。グリッドの名称はX軸にアルファベットを北から南へ、Y軸に算用数字を西から東へ当て、それぞれの交点に双方の記号を併用した名称を付し（第4図）、実測や遺物採集の際に使用した。遺構番号は、第1次調査から継続して連番とするため、土坑はSK144から、井戸跡はSE08から、溝跡はSD06から、そしてピットはPit193からとした。遺構実測は平板と簡易遣り方を用いて1/20縮尺で行った。写真撮影は35mm判カメラを主要機として白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを用い、さらに1000万画素のデジタルカメラを併用して調査の過程で随時撮影を行った。

発掘調査終了後、出土した遺物は全て水洗いし、乾燥後に可能な限り注記を行った。注記に際しては遺跡記号「MNZ」と出土地点、層位、採集日を記載した。遺物は接合作業を行った後、全て分類して種別や個体・破片ごとの点数を数え、出土遺物集計表（表13・14）に掲載した。遺構図は第二原図作成後、修正を加えた上でデジタルトレースを行った。遺物は全て原寸大で実測し、トレースはロットリングを使用して版下原稿を作成した。編集はDTPソフトウェアを用いて報告書の編集作業を行った。

（2）調査の経過

調査を実施するにあたり、7月3日に事業主体者側との打合せ、同月30日に調査区の設定、8月4・5両日で発掘器材及び施設の搬入等、調査の準備を行った。

発掘調査は8月7日から開始した。7日から11日にかけて表土除去を行った。お盆を挟み、作業員は17日から投入し、遺構確認から作業に入った。その日の内に確認を終了させ、確認状況の写真撮影を行うとともに、夕方には市教育委員会からの現場検証を受けた。18日、基準点及び方眼杭の設置、併せて5区では遺構の掘り下げを開始した。21日には5区の遺構掘削の継続とともに、全体の遺構配置図を作成した。22日、5区と併行して4区東側の掘削も開始し、4区SK164は七本桜軽石を主体とした陥し穴であることがわかった。一方でSE08も確認された。24日には5区全体を完掘し、平面図の作成に着手した。25日、本調査区で2基目の陥し穴SK172を確認し、こちらもSK164と同様に、七本桜軽石を主体としていた。

9月に入り、8月から継続していた遺構掘削が一段落したことから、4日より旧石器の調査を開始した。5日、SK188が新たに七本桜軽石を主体とした3基目の陥し穴であることが判明した。6日には遺構掘削をほぼ終了し、旧石器の調査は8日まで継続して終了した。同日午後から空撮に備えた清掃を開始した。11日、午前中までで全体清掃を終え、空撮を行った。午後から残っていた記録作業を行って、発掘調査を終了した。埋め戻しは14・15日両日で行い、発掘調査の全工程を終了した。

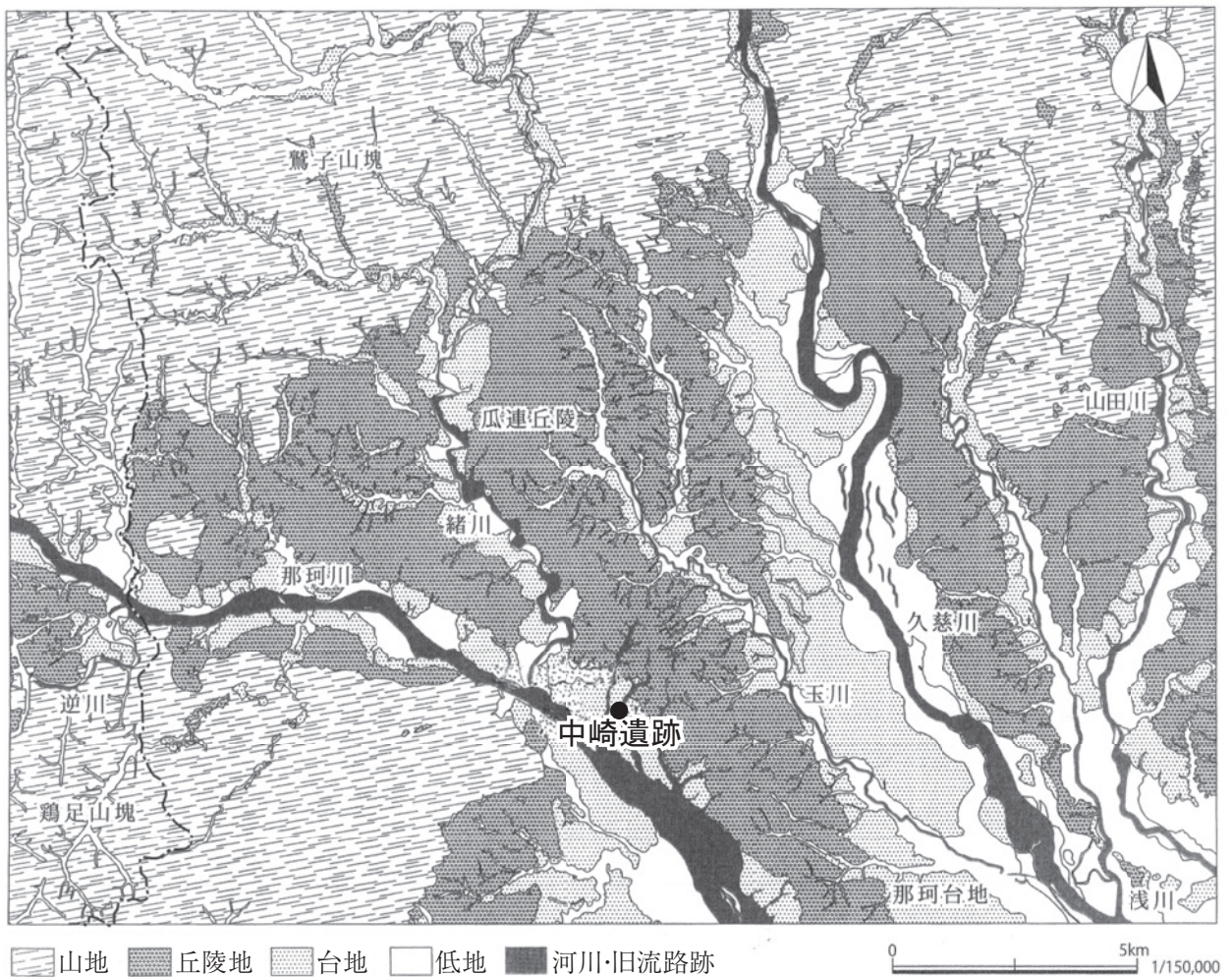
整理調査は、調査終了後速やかに実施した。9月下旬から遺物の水洗い作業から開始し、一方で遺構図の修正及びトレース作業にも着手した。遺物は水洗いを終えた後、注記作業を行った。10月半ばから接合作業を行い、併行して遺物の選別と全遺物数の集計及び出土遺物集計表の作成を行った。10月下旬から遺物の写真撮影、実測とトレース、観察表の作成を進め、11月より割り付け作業に入った。11月下旬にはほぼ割付を終了し、原稿の査読を教育委員会担当者に依頼した。原稿が返還されたのを待って、指摘箇所を修正後年明け1月に入稿し、校正を経て本報告書の刊行となった。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中崎遺跡は、茨城県北西部の常陸大宮市に所在する。茨城県北域の地形は、東側に阿武隈山地、西側に八溝山地が併行して福島県側から南下している。阿武隈山地は日立市・東海村を境とした久慈川左岸を南限とするものの、八溝山地は栃木県境沿いに筑波山塊まで延びている。八溝山地は西から東へと流れる那珂川により、北側が鷲子山塊、南側が鶏足山塊に分断されているが、その鷲子山塊の南方に標高を減じて発達した瓜連丘陵が広がる。瓜連丘陵地は、ちょうど西部の城里町との境を南東流する那珂川と東部の阿武隈山地を隔てる久慈川が南流し、この両河川に丘陵地全体が挟まれた形となっている。さらに丘陵地内は緒川や玉川といった小河川や谷による開析が著しく進んでいることがうかがえる。

中崎遺跡は、常陸大宮市の南域にあたり、ちょうど緒川が那珂川に合流する那珂川大橋付近から東方へ1.7km程下った那珂川左岸の河岸段丘上に立地する。段丘上の北西側は標高60m前後で、南東にかけて緩やかな傾斜が認められ、沢に挟まれた本遺跡の範囲は標高59m前後となっている。



第1図 地形図



第2図 周辺の遺跡分布図

第2節 歴史的環境

常陸大宮市には、茨城県北を代表する二大河川、那珂川と久慈川、その支流となる緒川、玉川の河岸段丘上に多くの遺跡が周知されている。遺跡総数は350か所を数え、市内を5地区に分けた内訳は、大宮地域で154か所、山方地域で35か所、美和地域で39か所、緒川地域で22か所、御前山地域で100か所となっている。

市内で古くから知られている遺跡は、主に大宮地域に多く展開している。調査が行われた各時期の代表的な遺跡を挙げてみると、旧石器では昭和49年に調査が行われた久慈川右岸の梶巾遺跡が知られており、尖頭器、石核、石刃、石槌、台石などの石器とともに2,000点以上の剥片が出土している。縄文時代では、中・後期の大規模な遺跡が目立つ。特に玉川下流域の下村田に所在する坪井上遺跡は中期の集落で、翡翠製大珠8点がまとまって出土したことが特筆される。弥生時代では、近年になって久慈川

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代・時期							備考	地図番号	
			旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			
1	中崎遺跡	集落跡		○								大087
2	赤岩遺跡	集落跡	○	○	○	○	○	○			H23,24に発掘調査・範囲拡大	大059
3	三美中道遺跡	集落跡		○	○	○	○				H24,26に発掘調査	大009
4	滝ノ上遺跡	集落跡		○				○			H25,26,27に発掘調査	大029
5	三美根岸遺跡	集落跡		○		○						大012
6	川野辺(野口)城跡	城館跡							○		市指定史跡。H27範囲拡大	御076
7	内原遺跡	集落跡		○		○	○			○		御080
8	西塚遺跡	集落跡		○		○	○	○	○		H19,21に発掘調査	御081
9	岡原遺跡	集落跡		○		○	○	○	○		H22に発掘調査	御073
10	野口平館跡	城館跡							○		H27名称変更,範囲拡大	御096
11	榎内古墳	古墳				○					山根遺跡の北端部に石棺の一部と思われる平石が出土。墳丘はない。	御067
12	矢口遺跡	集落跡			○		○					御074
13	山根遺跡	集落跡		○	○	○	○				H25に発掘調査	御069
14	京銭内古墳	古墳				○					山根遺跡の南端部の畑より直刀等が出土。墳丘無。	御068
15	中島遺跡	集落跡				○	○				土取りにより一部湮滅	御071
16	泉沢B遺跡	集落跡		○							S52一部測量	大020
17	泉沢C遺跡	集落跡			○							大141
18	小野天神前遺跡	集落跡		○	○		○				S51に発掘調査	大013
19	小野中道遺跡	集落跡		○	○	○	○					大047
20	源氏平遺跡	集落跡		○			○				S58調査	大101
21	高ノ倉城跡	城館跡		○		○	○	○				大039
22	高ノ倉遺跡	集落跡		○	○	○	○				一部湮滅,H16に発掘調査	大006
23	三美の蓄銭	備蓄銭							○		S58出土	大140
24	居合遺跡	集落跡					○				S58湮滅	大102
25	一の沢塚群	塚群								○	4基	大134
26	前山瓦窯跡	瓦窯跡					○					大138
27	泉沢A遺跡	集落跡		○								大014
28	町宮牧場内遺跡	集落跡		○								大053
29	西原遺跡	集落跡		○			○	○				大095
30	八幡塚	塚									時期不明	御093
31	八幡遺跡	集落跡					○					御075
32	館遺跡	集落跡					○					御078
33	御城遺跡	集落跡					○					御077
34	内古屋遺跡	集落跡					○	○	○			御079
35	上宿遺跡	集落跡		○			○					御084
36	時雍館址	その他(郷校)								○	現野口小学校。平成8年3月15日付指定	御094
37	成井遺跡	包蔵地					○					御072
38	片セ田遺跡	包蔵地					○					御070
39	下平道添遺跡	集落跡					○					御066
40	森前遺跡	集落跡		○			○					御065
41	清水遺跡	集落跡					○					御064
42	御前山城跡	城館跡							○		城里町	—

※常陸大宮市教育委員会生涯学習課発行『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財分布地図(平成27年12月現在)』をもとに作成。
 ※「地図番号」は上記した分布地図に示された遺跡番号を記載した。

と玉川の合流点付近に立地する泉坂下遺跡の調査により、国内最大の再葬墓群が認確され、遺跡は国史跡に、人面付壺形土器を含む再葬墓関連遺物は国の重要文化財として同時期に指定された。古墳時代では、久慈川と玉川の合流点に向かって突出する台地上に築造された富士山古墳群がある。4号墳は前方後方墳で、後方部正面が剣菱状、前方部が撥状を呈する形態から、前期古墳の中でも古い要素を持っている。奈良・平安時代では、久慈川右岸の鷹巣原遺跡、玉川右岸の小中遺跡で行われた集落跡の調査では、多くの墨書土器が出土しており、貴重な文字資料が提供されている。

目を転じて、中崎遺跡周辺における那珂川流域の遺跡（第2図）を概観してみたい。

旧石器時代の遺跡では、本遺跡と同じ河岸段丘上の西側縁辺部に所在する赤岩遺跡（2）第2次調査では、礫群3基と石器・剥片集中地点3か所が検出されている。

縄文時代になると遺跡は数多く点在し、岡原遺跡（9）では早期・田戸下層式期の竪穴住居跡が目目される。中期になると遺跡数は増加する。高ノ倉遺跡（22）は、中期中葉～後葉にかけての土坑群224基が調査されている。西埜遺跡（8）は2期にわたり調査が行われ、緩傾斜地の高位面に位置する北側（2次調査）では有段式建物跡を含めた阿玉台式Ⅱ～Ⅳ期・大木8a式期の遺構が短期間に集中しているのに対し、低位面に位置する南側（1次調査）では中期後半の大木8b・9a式期、後期前半の称名寺式期、網取式期を中心として縄文時代前期～晩期にいたる幅広い時期の痕跡が同一丘陵上で認められる。一方、この西埜遺跡から見て緒川を挟んだ対岸に位置する赤岩遺跡南部・三美中道遺跡（3）西部とその東側に隣接する三美中道遺跡東部・滝ノ上遺跡（4）を見ていくと、前者は有段式建物跡が確認され、時期は阿玉台Ⅱ～Ⅳ式期、大木8a式期を主体としているのに対し、後者は阿玉台式期とともに加曾利EⅠ～EⅣ式期、大木8b～10式期までの集落が営まれ、西埜遺跡と同じ様相がうかがえる。このように異なった時期の集落が展開するのは、那珂川左岸中流域での特徴なのかもしれない。

弥生時代では、小野天神前遺跡（18）があり、前述した泉坂下遺跡以前に人面付壺形土器とそれを埋納した土壙墓が多数確認されたことで有名になった遺跡である。

古墳時代では、赤岩遺跡（1次調査）で主体部に横穴式石室を持つ径16～17mの円墳が確認されており、市域内において那珂川流域に古墳が存在したことを裏付ける貴重な発見である。

奈良・平安時代では岡原遺跡、赤岩遺跡北部、西埜遺跡、小野天神前遺跡、源氏平遺跡（20）などで調査が行われ、棟数の多少はあるものの集落が営まれている。その内、小野天神前・源氏平の両遺跡からは文字瓦が出土し、源氏平遺跡の15号住居跡からは漆紙文書も確認されていることから那賀郡衙との関係が指摘されている。

中世では、川野辺（野口）城跡（6）、新京寺（野口平）館跡（10）、高ノ倉城跡（21）、御前山城跡（42）など、城館を中心とした遺跡が那珂川とその支流である緒川の流域で多く周知されているが、具体的な調査事例は少ない。その中であって岡原遺跡で12基の地下式坑が集中して検出されていることは、点在する城館跡との関連性が示唆される場所である。赤岩遺跡南部では15世紀後半に段丘上西端の台地を区画する堀の調査が行われ、その周辺では「三美の蓄銭」（23）として永楽通寶を最新とした埋納銭が発見されている。

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

中崎遺跡における調査は今回で2回目となる。前回実施された第1次調査（1～3区）の成果としては、縄文時代早・前期、後期の竪穴住居跡10軒、草創期の陥し穴5基を含めた土坑21基、中世以降の井戸跡7基、土坑2基、墓壙11基、時期不明の土坑97基、溝跡5条、ピット192基が確認された。遺物は縄文時代の深鉢形土器、浅鉢形土器と近世以降の陶磁器類、土師質土器、瓦質土器、刀子や煙管などの製品や銭貨などが出土している（平石2017）。

今回対象となった地点は、第1次調査の1区東部南側に接した東西に長い調査区で、4・5区合わせると全長は約100mになる（第3図）。調査前の現況は畑地で、地表面の標高は59m前後、遺構検出面は表土層（Ⅰ層）直下、七本桜軽石層（Ⅱ層）から今市スコリア層（Ⅲ層）上面となる（第6図）。4区は全体に牛蒡等の耕作によってトレンチャーが激しく入り込んでいるが、西側は表土層（Ⅰ層）が厚かったためほとんど影響を受けていない。

4区では、表土除去後の遺構確認で242か所の落ち込みを確認している。その配置を見ると西側へ移行するに従って密集度が増していく。しかし、これらを全て半截したところ、次の3種類に区分するこ



第3図 調査区位置図

とができた。

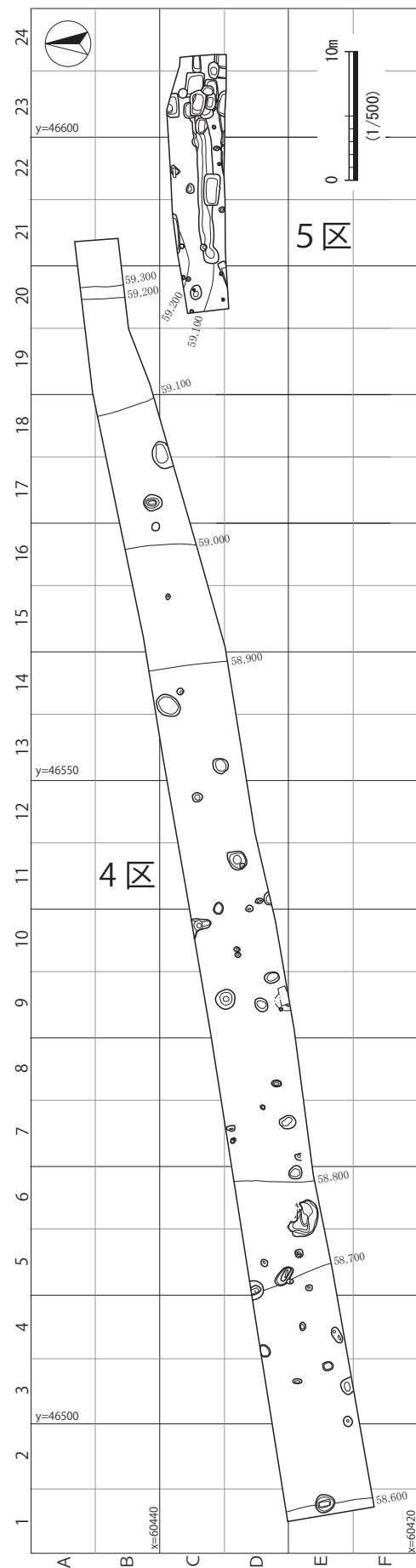
- (1) 形態が整い、覆土は黒色土を主体とする。
- (2) 覆土に七本桜軽石・今市スコリアを主体とする。
- (3) 形態が不整形で深度が浅く、覆土に塊状の今市スコリアが50%以上混在する。

この内、(3)は人為的な掘り込みとは思われないことから遺構から除外することとし、結果的に242か所の内遺構としたのは、44か所のみであった(第4・5図)。

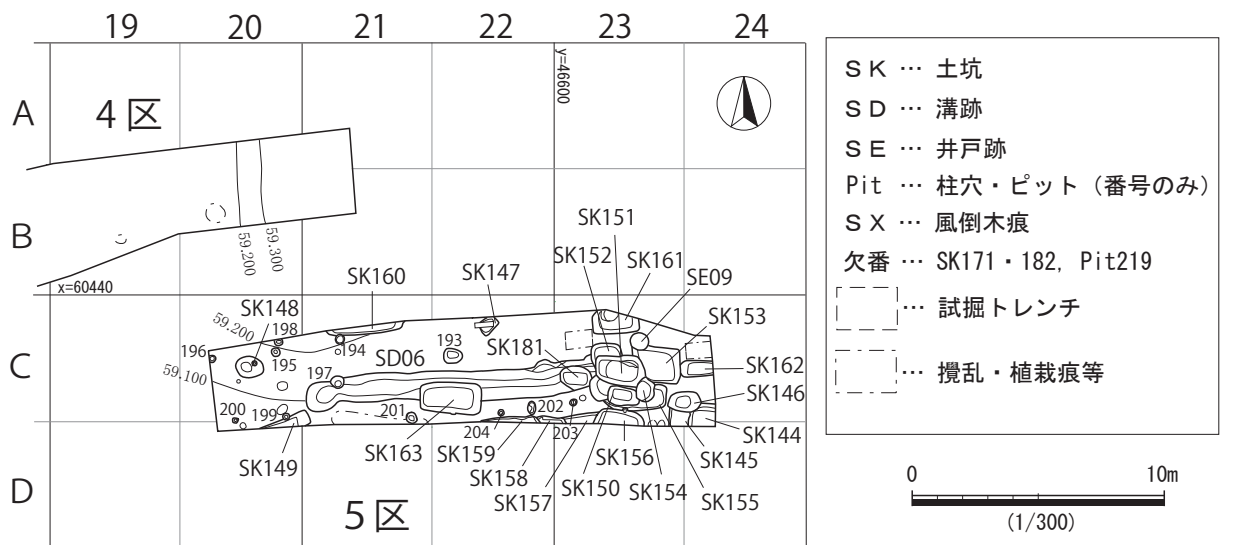
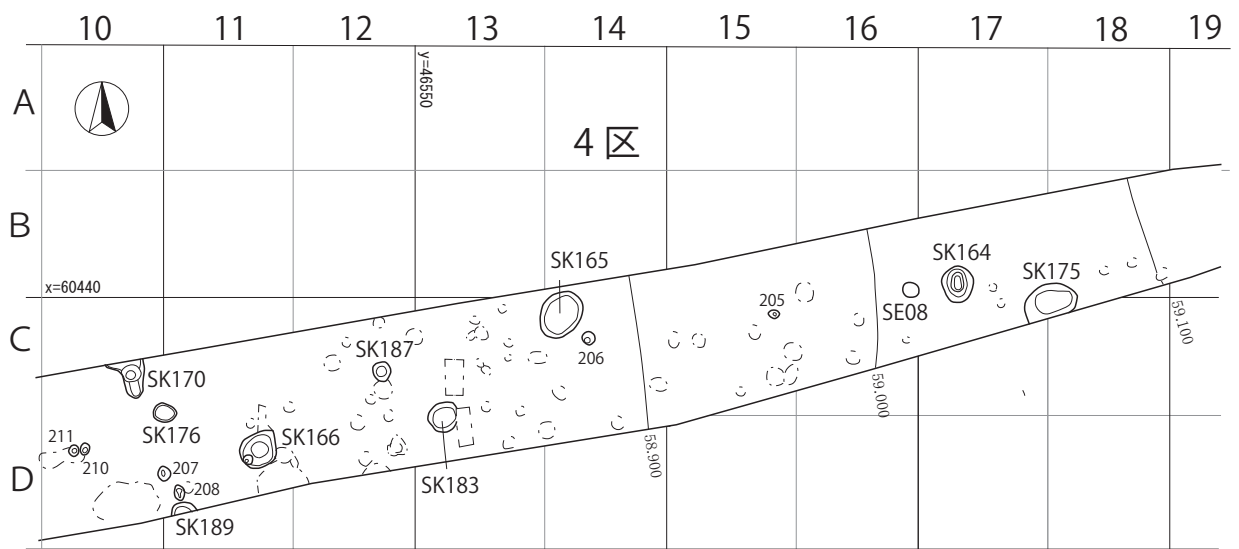
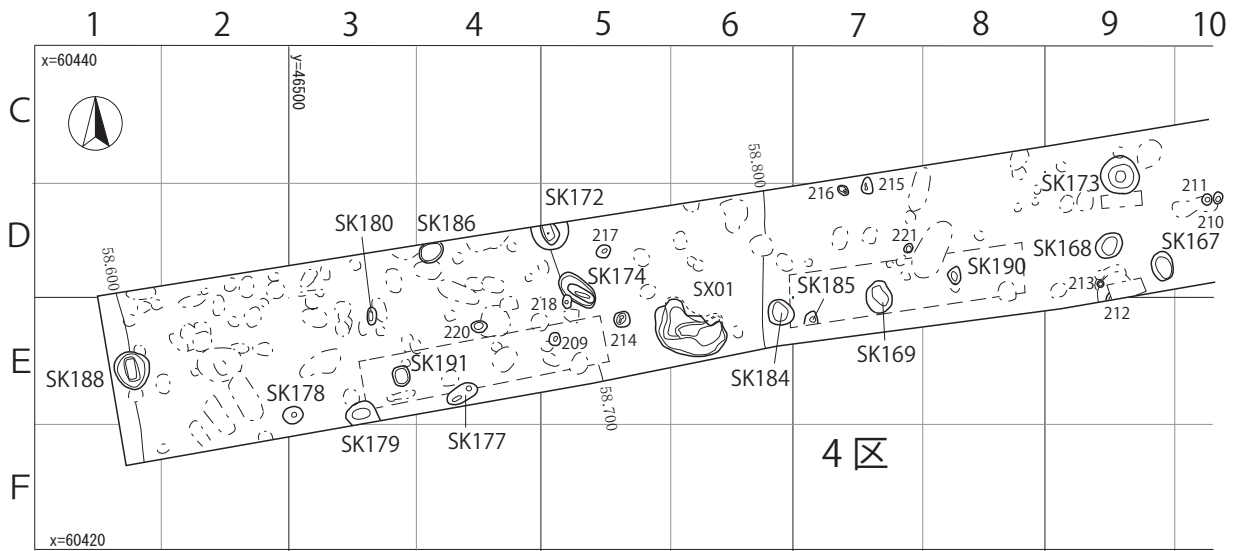
一方5区では、4区に比べて狭小な調査区ではあったが、東側を中心に方形状の土坑群や溝が激しく切り合っていた。ただ、覆土は4区で認められた土坑群とは異なった状態で、近世以降の遺物を伴っている。

以上の状況から、第2次調査で確認した遺構は、陥し穴3基(SK164・172・188)を含めた縄文時代と考えられる土坑19基(SK147・165～170・173・183～187・189～191)、ピット3基(Pit193・197・220)風倒木痕1か所(SX01)、近世以降の井戸跡2基(SE08・09)、溝跡1条(SD06)、土坑20基(SK144～146・149～163・175・181)、ピット10基(Pit194～196・198～204)、時期不明の土坑7基(SK148・174・176～180)、ピット15基(Pit205～218・221)であった。

出土した遺物は総点数77点(表13・14)で、縄文時代以前のものと考えられる遺物は、メノウの微小剥片1点、石器1点(敲き石1)で土器類は全く出土しなかった。主な出土遺物は、近世以降の所産と考えられる陶器23点(碗13、皿2、播鉢3、徳利1、壺4)、磁器5点(染付碗4、小杯1)、土師質土器23点(かわらけ2、壺・甕類12、土鍋4、不明5)、瓦質土器16点(土鍋2、火鉢13、香炉1)で土器・陶磁器片の総数は67点を数える。それ以外は砥石を中心とした石製品6点、小破片のため器種が不明の銅・鉄製品が各1点であった。4区表採の播鉢と攪乱から出土の瓦質土器片以外は全て5区からの出土である。



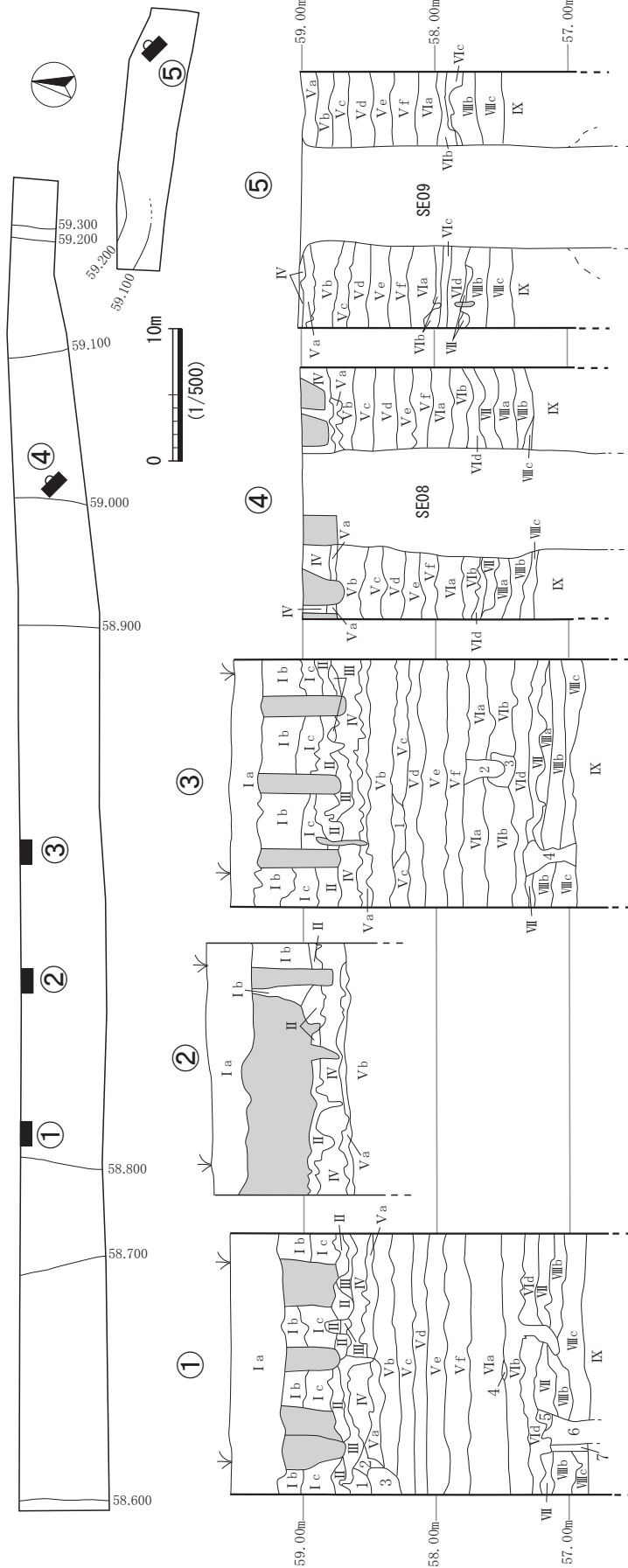
第4図 遺構全体図(1)



- SK ... 土坑
- SD ... 溝跡
- SE ... 井戸跡
- Pit ... 柱穴・ピット (番号のみ)
- SX ... 風倒木痕
- 欠番 ... SK171・182, Pit219
- 試掘トレンチ
- 攪乱・植栽痕等



第5図 遺構全体図(2)



第6図 基本層序

基本層序

- I a. 10YR 3/1 黒褐色土 表土。耕作土または盛土層。縮まり、粘性弱。
- I b. 10YR 1-7/1 黒色土 表土。斑状の褐色土がわずかに認められる。縮まり・粘性弱。
- I c. 10YR 3/2 黒褐色土 表土。黄色粒・褐色粒・白色粒微。縮まり有、粘性弱。
- II. 2.5Y 4/2 暗灰黄色土 SP粒多(40%), IS粒中。縮まり強、粘性弱。
- III. 2.5Y 7/4 浅黄色土 SP粒主体。IS粒中。縮まり強、粘性なし。
- IV. 5YR 5/6 明赤褐色土 IS粒主体, SP粒少。縮まり強、粘性なし。
- V a. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 ローム質土。塊状 SP粒少, 塊状 IS多(40%)。縮まり・粘性有。
- V b. 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 ソフトローム層。白色粒微。縮まり・粘性有。
- V c. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 ソフトローム層。斑状になった淡黄色土(2.5Y8/4)をまばらに含む。縮まり有、粘性強。
- V d. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 ソフトローム層。斑状になった灰白色土(2.5Y8/2)多(20%)。縮まり有、粘性強。
- V e. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 ソフトローム層。斑状になった灰白色土(2.5Y8/2)ブロック(φ2~7mm)少, 白色粒微。縮まり、粘性有。
- V f. 10YR 6/3 にぶい黄褐色土 ソフトローム層。縮まり・粘性有。* Vc~Veに比べ縮りがやや固い。
- V Ia. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ハードローム層。淡黄色粒(2.5Y8/4)微。縮まり強、粘性あり。
- V Ib. 10YR 6/3 にぶい黄褐色土 ハードローム層。淡黄色粒(2.5Y8/4)少。縮まり強、粘性あり。
- V Ic. 2.5Y 7/3 浅黄色土 ハードローム層。淡黄色粒(2.5Y8/4)少。縮まり強、粘性あり。
- VId. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ハードローム層。淡黄色土(2.5Y8/4)。同色粒多(20%)。縮まり非常に強、粘性弱。
- VII. 2.5Y 5/1 黄灰色土 浅黄色土(2.5Y7/4)。同色粒多(40%)。縮まり非常に強、粘性弱。
- VIII a. 2.5Y 6/6 明黄褐色土 KP純層。粒状やや粗い。縮まり非常に強、粘性弱。
- VIII b. 2.5Y 8/4 淡黄色土 KP純層。粒状細かい。縮まり非常に強、粘性弱。
- VIII c. 10YR 7/6 明黄褐色土 KP純層。粒状粗い。縮まり非常に強、粘性弱。
- IX. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ハードローム層。淡黄色粒(2.5Y8/4)少。縮まり非常に強、粘性弱。



TP①

- 1. 10YR 7/3 にぶい黄褐色土 SP粒多(20%), IS粒中。III層下から掘り込まれている。縮まり強、粘性なし。
- 2. 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 SP粒少, IS粒多(20%)。III層下から掘り込まれている。縮まり強、粘性弱。
- 3. 10YR 7/6 明黄褐色土 ローム質土。SP粒少, IS粒微。縮まり強、粘性有。
- * 1~3層はSP粒・IS粒を覆土に含む、落ち込みと考えられる。
- 4. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 VIa, VIIb層中に挟まれているが、縮まりが弱い。粘性やや強。
- 5. 10YR 7/4 浅黄色土 ローム質土。浅黄色(2.5Y7/4)粒中。縮まり強、粘性弱。
- 6. 2.5Y 7/4 浅黄色土 ローム質土。浅黄色(2.5Y7/4)粒中。縮まり強、粘性弱。
- 7. 2.5Y 6/2 灰黄色土 ローム質土。浅黄色(2.5Y7/4)粒中。縮まり強、粘性弱。
- * 5~7はVIIIa, VIIIb層を分断している。

TP③

- 1. 10YR 6/3 にぶい黄褐色土 Vc層と同質だが、若干色調が暗めで黒色粒を微量含む。縮まりもVc層に比べ若干弱い。
- 2. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 VIa層を切り込む。灰黄褐色土(10YR5/2)をまばらに含む。縮まり弱。
- 3. 2.5Y 7/2 灰黄色土 VIc層中にあり、2の底部を囲むようにある。シルト質土。縮まりやや強。
- 4. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土 VIIc層を切り、VII層と同質の黄灰色土とVId層とほぼ同質のにぶい黄褐色土が混在する。縮まり強。

第2節 基本層序

本調査地点では、基本堆積土層観察のための試掘坑を5か所設定した（第6図、TP①～⑤）。その内、TP④・⑤は井戸跡（SE08・09）の深掘りを容易にする断ち割りを利用しているため、遺構検出面からの観察である。また、SK30の壁面に接する部分からやや大型の砂岩礫が出土したため、旧石器の広がる可能性が考えられることから、礫を中心とした試掘坑TP②を設定してV層まで観察を行っている。

I層は表土層で、a～cの3層に分層できる。I a層は耕作土・盛土層で調査区全体を通しほぼ20～30cm程の層厚である。I b・I c層は黒色土で4区のみ認められ、4区東端ではほとんど堆積していないが、西端での層厚は50cm前後に達し、この約100mの間に標高も約70cmの比高差が確認できる。II層は七本桜軽石を多量に含んでおり、七本桜軽石を主体としたIII層の漸移的な層になっている。III層は明瞭に遺存する部分が少なく、TP①でしか確認されていない。IV層は今市スコリア層を主体とする層で、4・5区通して安定した堆積が観察される。このII～IV層上面が遺構検出面となる。V層はソフトローム層で、含有物の相違によりa～fの6層に分層した。色調はにぶい黄橙色土を主体としており、若干の明暗差が認められる。V a層はIV層の今市スコリアが含まれている。V c・V d層では淡黄色土・灰白色土を斑に含んでおり、粘性も非常に強い。また、下層へ移行するに従い締まりが強くなってくる。VI層はハードローム層で、色調や締まりなどの違いからa～d層の4層に分層した。淡黄色の鹿沼軽石とみられる粒が含まれるようになり、締まりの強さもさらに増してくる。VII層は灰色がかり、極端に固く締まったハードロームに鹿沼軽石粒が多量に含まれた層で、VIII層への漸移的な様相である。VIII層は鹿沼軽石層で、主に粒状の差異からa～c層の3層に分層した。VIII b層は粒状が細かく上下の層に比べてやや白色化が顕著である。IX層以下はハードローム層で、上層では鹿沼軽石粒が含まれていた。

第3節 遺構と遺物

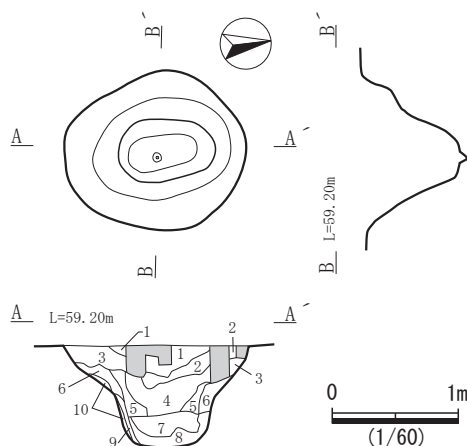
1 縄文時代

(1) 陥し穴

第164号土坑〔第7図、巻頭図版2〕

検出位置は4区東側、B17・C17グリッドにまたがっている。上部はトレンチャーによる攪乱が著しい。重複遺構はない。平面形状は楕円形で、開口部が挿鉢状に広くなり、中央部に段を持って本体は箱状に掘り込まれている。規模は開口部が長軸143cm、短軸126cm、底部は長軸55cm、短軸28cmで、深さは77cmを測り、中央部に径6cm、深さ7cmの逆円錐形に掘り込まれた逆茂木跡が1本検出された。主軸方向はN-7°-Eを示す。覆土は自然堆積層を呈し、開口部は白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体又は多量に含む層で、締まりが非常に強い。一方、本体には赤褐色の今市スコリアを主体とした層が厚く堆積し、底部直上には壁の崩落が原因とみられる粒状の粗い七本桜軽石粒が認められる。遺物は出土していない。

時期は、覆土が七本桜軽石、今市スコリアを主体とし、その軽石の土壌化があまり進んでいない覆土の状態を考えると、軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期と想定される。



SK164

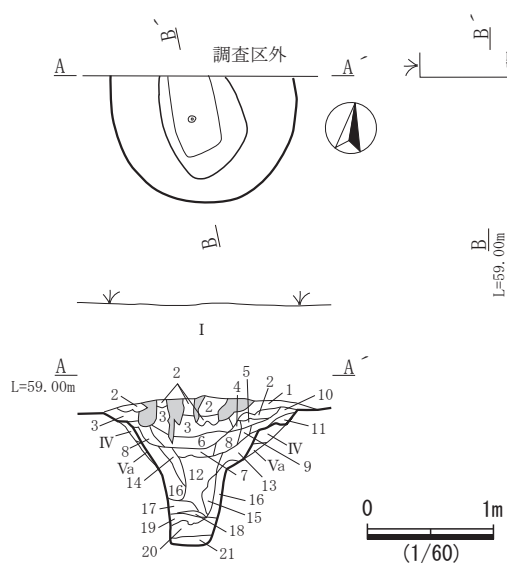
1. 5Y 6/2 灰オリーブ色土 SP粒密, IS粒少. 縮まり強, 粘性なし。
2. 2.5Y 6/2 灰黄色土 SP粒・IS粒多(40%). 縮まり強, 粘性なし。
3. 10YR 6/3 にぶい黄橙色土 ローム質土. SP粒・IS粒多(20%). 縮まり・粘性有。
4. 5YR 4/8 赤褐色土 IS主体. SP粒少. 縮まり強, 粘性なし。
5. 7.5YR 6/4 にぶい橙色土 SP粒多(20%), IS粒多(40%). 縮まり強, 粘性なし。
6. 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 ローム質土. SP粒少, IS粒中. 縮まり・粘性有。
7. 2.5YR 4/6 赤褐色土 IS主体. SP粒少. 黒色土粒微. 縮まり強, 粘性なし。
8. 2.5Y 6/2 灰黄色土 SP主体. IS粒多(20%). 縮まり有, 粘性なし。
9. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ローム土混土. SP粒微, IS粒多(20%). 縮まり・粘性有。
10. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム質土. IS粒少. 縮まり・粘性有。

第7図 第164号土坑

第172号土坑 [第8図, 巻頭図版2]

検出位置は4区西側, D4・D5グリッドにまたがっている。上部はトレンチャーにより一部が攪乱され, さらに北側は調査区外に延びている。重複遺構はない。平面形状は楕円形とみられ, 開口部が楕円状に広くなり, 中央部に段を持って本体は箱状に掘り込まれている。規模は開口部の長軸が現存値で100cm, 短軸は145cm, 底部の長軸が現存値で52cm, 短軸は33cmで, 深さは107cmを測り, 中央部と思われる部分に径6cm, 深さ7cmの逆円錐形に掘り込まれた逆茂木跡が1本検出された。主軸方向はN-17°-Wを示す。覆土は自然堆積層を呈し, 開口部は白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体とする層で, 縮りが非常に強い。一方, 本体には赤褐色の今市スコリアを主体とした層が厚く堆積し, 粒状の粗い浅黄色粒の七本桜軽石主体の層が中間と底部直上に認められた。また, 七本桜軽石, 今市スコリア粒を含有する崩落と思われるローム質土(16・17・19層)が本体覆土中に入り込んでいることや全体の覆土が複雑化しているのは, 北壁面が近いからではないかと考えられる。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない覆土の状態を考えると, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



SK172

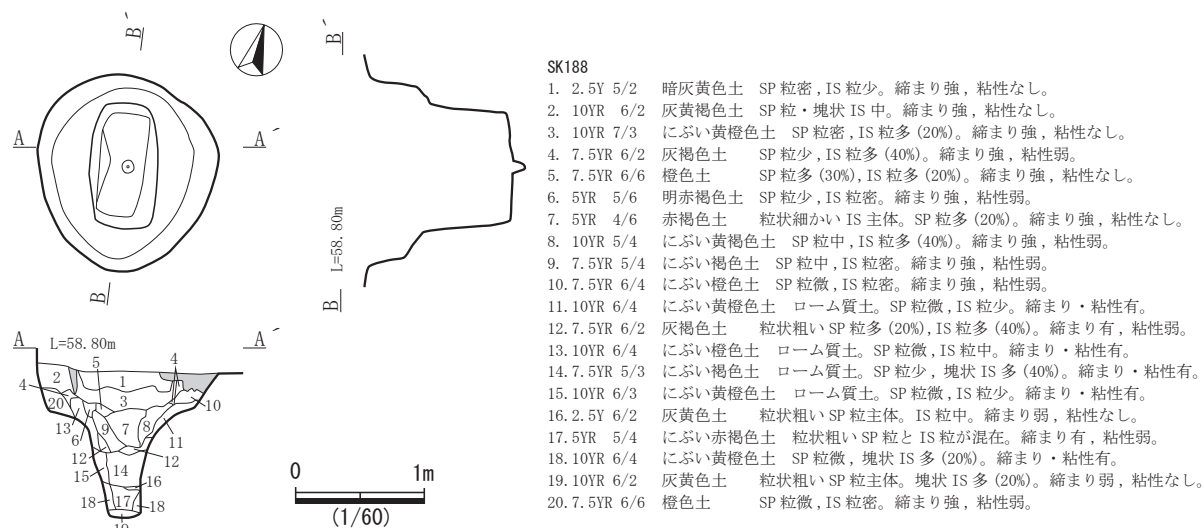
1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土 SP粒・塊状IS粒多(20%). 縮まり強, 粘性弱。
2. 2.5Y 6/2 灰黄色土 SP粒密. 縮まり強, 粘性なし。
3. 2.5Y 7/4 浅黄色土 粒状細かい. SP粒主体, IS粒微. 縮まり強, 粘性なし。
4. 10YR 7/3 にぶい黄橙色土 SP粒多(40%), IS粒中. 縮まり強, 粘性弱。
5. 7.5YR 7/4 にぶい橙色土 SP粒密. 縮まり強, 粘性なし。
6. 2.5Y 7/3 浅黄色土 粒状細かい. SP粒主体, 塊状IS少. 縮まり強, 粘性なし。
7. 2.5Y 7/3 浅黄色土 粒状細かい. SP粒主体, 塊状IS多(40%). 縮まり強, 粘性なし。
8. 10YR 6/3 にぶい黄橙色土 SP粒多(40%), IS粒中. 縮まり強, 粘性弱。
9. 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 SP粒多(30%), IS粒少. 縮まり強, 粘性なし。
10. 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 SP粒・IS粒多(40%). 縮まり強, 粘性なし。
11. 7.5YR 5/3 にぶい褐色土 SP粒中, IS粒密. 縮まり強, 粘性弱。
12. 5YR 5/6 明赤褐色土 SP粒多(40%), IS粒主体. 縮まり強, 粘性なし。
13. 7.5YR 6/4 にぶい橙色土 SP粒・IS粒中. 縮まり有, 粘性弱。
14. 7.5YR 5/4 にぶい褐色土 SP粒少, IS粒中. 縮まり有, 粘性弱。
15. 5YR 5/4 にぶい赤褐色土 SP粒少, IS粒多(30%). 縮まり有, 粘性弱。
16. 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 ローム質土. SP粒少, IS粒中. 縮まり・粘性有。
17. 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 ローム質土. SP粒微, IS粒少. 縮まり・粘性有。
18. 2.5Y 7/3 浅黄色土 粒状粗いSP粒主体. 縮まり弱, 粘性なし。
19. 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 ローム質土. SP粒少, IS粒微. 縮まり・粘性有。
20. 5YR 4/6 赤褐色土 粒状粗いSP粒とIS粒が混在. 縮まり弱, 粘性なし。
21. 2.5Y 6/2 灰黄色土 粒状粗いSP粒主体. IS粒微. 縮まり弱, 粘性なし。

第8図 第172号土坑

第 188 号土坑 [第 9 図, 巻頭図版 2]

検出位置は 4 区西端, E1 グリッドである。上部はトレンチャーによりわずかに攪乱されるが, 遺存状態は他の陥し穴に比べて良好である。重複遺構はない。平面形状は楕円形で, 開口部が挿鉢状に広くなり, 中央部に段を持って本体は箱状に掘り込まれている。規模は開口部が長軸 149cm, 短軸 140cm, 底部が長軸 83cm, 短軸 35cm で, 深さは 116cm を測り, 中央部に径 9cm, 深さ 9cm の逆円錐形に掘り込まれた逆茂木跡が 1 本検出された。主軸方向は N-14°-W を示す。覆土は自然堆積層を呈し, 開口部は白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体とする層で, 締りが非常に強い。一方, 本体には赤褐色の今市スコリアを主体とした層が厚く堆積し, 粒状の粗い浅黄色粒の七本桜軽石主体の層が互層に入り込む。さらに底部直上にも同様の層が認められた。また, 七本桜軽石粒を含有するローム質土 (15・18 層) が本体壁際に崩落している。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壤化があまり進んでいない覆土の状態を考えると, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



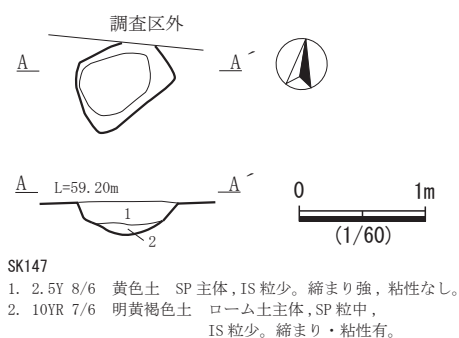
第 9 図 第 188 号土坑

(2) 土坑・ピット

第 147 号土坑 [第 10 図]

検出位置は 5 区中央部の C22 グリッドである。北端が調査区外となるが重複遺構はない。平面形は方形で断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 75cm, 短軸 55cm, 深さは 22cm を測り, 主軸方向は N-48°-E を示す。覆土は, 白色・浅黄色の七本桜軽石粒を多量に含む層を主体とした自然堆積である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石を主体とし, 軽石の土壤化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。

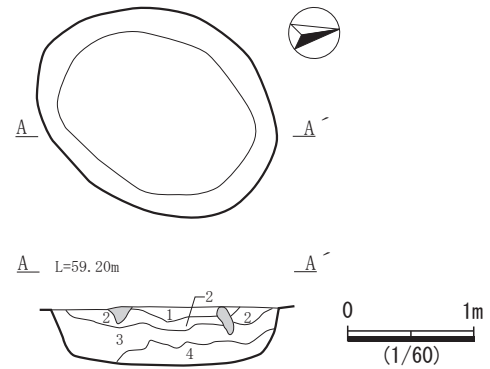


第 10 図 第 147 号土坑

第 165 号土坑 [第 11 図, 図版 1]

検出位置は 4 区中央部東寄りの B14・C14 グリッドにまたがる。上部はトレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は楕円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 197cm, 短軸 155cm, 深さは 43cm を測り, 主軸方向は N-38°-E を示す。覆土は, 1 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を多量に含み, 2・3 層は赤褐色の今市スコリアを主体とする。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, 軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



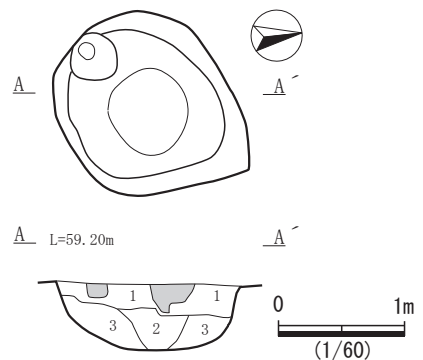
- SK165
- 1. 2.5Y 6/2 灰黄色土 SP 粒・IS 粒多 (40%)。締まり強, 粘性なし。
 - 2. 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 SP 粒多 (20%), IS 粒密。締まり強, 粘性なし。
 - 3. 5YR 4/8 赤褐色土 SP 粒微, IS 粒主体。締まり有, 粘性なし。
 - 4. 7.5YR 6/6 橙色土 ローム質土。SP 粒微, 塊状 IS 多 (40%)。締まり・粘性有。

第 11 図 第 165 号土坑

第 166 号土坑 [第 12 図, 図版 1]

検出位置は 4 区中央部の D11 グリッド地点である。上部はトレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は楕円形で、断面は半円状を呈する。規模は長軸 173cm, 短軸 135cm, 深さは 52cm を測り, 主軸方向は N-37°-E を示す。南西壁際で径 38cm, 深さ 11cm のピット状となる落ち込みが検出される。覆土は, 1 層で白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体とする層が厚く堆積し, 2・3 層は赤褐色の今市スコリアを多量に含む。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。

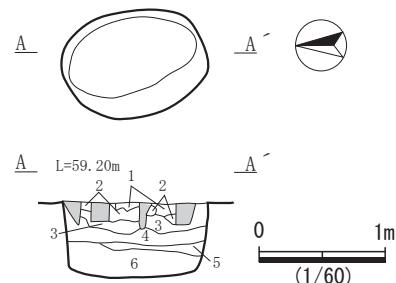


- SK166
- 1. 2.5YR 6/2 灰黄色土 SP 粒密, IS 粒多 (20%)。締まり強, 粘性なし。
 - 2. 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 SP 粒中, IS 粒多 (20%)。締まり強, 粘性なし。
 - 3. 7.5YR 7/4 にぶい橙色土 SP 粒少, IS 粒多 (40%)。締まり強, 粘性弱。

第 12 図 第 166 号土坑

第 167 号土坑 [第 13 図, 図版 1]

検出位置は 4 区中央部西寄りの D9 グリッドである。上部はトレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は楕円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 113cm, 短軸 84cm, 深さは 58cm を測り, 主軸方向は N-12°-W を示す。覆土は, 2 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体とし, 1・3・4 層は七本桜軽石粒と赤褐色の今市スコリアを多量に含む。5・6 層は軽石を含むローム質土である。



- SK167
- 1. 2.5Y 4/2 暗灰黄色土 SP 粒・IS 粒多 (20%)。締まり強, 粘性なし。
 - 2. 2.5Y 6/2 灰黄色土 SP 粒密, IS 粒少。締まり強, 粘性なし。
 - 3. 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 SP 粒多 (30%), IS 粒多 (20%)。締まり強, 粘性弱。
 - 4. 10YR 7/6 明黄褐色土 SP 粒中, IS 粒多 (20%)。締まり強, 粘性弱。
 - 5. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム質土。SP 粒少, IS 粒中。締まり・粘性有。
 - 6. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム質土。SP 粒・IS 粒中。締まり・粘性有。

第 13 図 第 167 号土坑

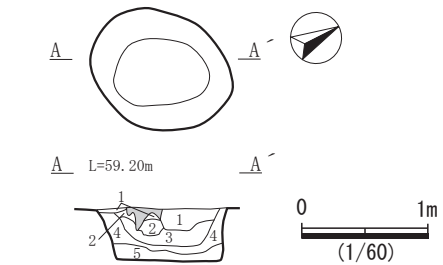
遺物は出土していない。

時期は、覆土が七本桜軽石、今市スコリアを主体とし、その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから、軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。

第 168 号土坑 [第 14 図]

検出位置は 4 区中央部西寄りの D9 グリッドである。上部はトレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は楕円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 114cm、短軸 90cm、深さは 42cm を測り、主軸方向は N-49° -E を示す。覆土は、1 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体とし、2～4 層は赤褐色の今市スコリアを多量に含み、4 層以下は軽石粒を含むローム質土が堆積する。遺物は出土していない。

時期は、覆土が七本桜軽石、今市スコリアを主体とし、その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから、軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



SK168

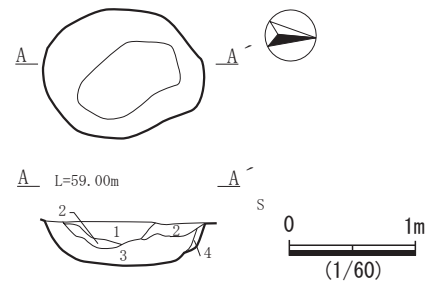
1. 2. 5Y 6/2 灰黄色土 SP 粒密, IS 粒中。縮まり強, 粘性なし。
2. 7. 5Y 6/6 橙色土 SP 粒・IS 粒多 (40%)。縮まり強, 粘性なし。
3. 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 SP 粒・IS 粒多 (20%)。縮まり強, 粘性弱。
4. 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 SP 粒多 (20%), IS 粒中。縮まり強, 粘性弱。
5. 10YR 6/6 明褐色土 ローム質土。SP 粒・IS 粒少。縮まり・粘性有。

第 14 図 第 168 号土坑

第 169 号土坑 [第 15 図, 図版 1]

検出位置は 4 区西側中央部寄りの D7・E7 グリッドにまたがる。重複遺構はない。平面形はほぼ円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 126cm、短軸 102cm、深さは 38cm を測り、主軸方向は N-14° -W を示す。覆土は、白色・浅黄色の七本桜軽石粒と赤褐色の今市スコリア粒を多量に含む。遺物は出土していない。

時期は、覆土が七本桜軽石、今市スコリアを主体とし、その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから、軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



SK169

1. 10YR 6/3 にぶい黄橙色土 SP 粒密, IS 粒少。縮まり強, 粘性なし。
2. 7. 5YR 6/4 にぶい橙色土 SP 粒多 (20%), IS 粒密。縮まり強, 粘性なし。
3. 7. 5YR 6/6 橙色土 SP 粒中, IS 粒多 (20%)。縮まり強, 粘性弱。
4. 7. 5YR 5/3 にぶい褐色土 ローム質土。SP 粒少, IS 粒多 (20%)。縮まり・粘性有。

第 15 図 第 169 号土坑

第 170 号土坑 [第 16 図]

検出位置は 4 区中央部の C10 グリッドである。トレンチャーにより一部攪乱を受け、北側は調査区外に延びる。重複遺構はない。平面形は不整形で、断面は鍋底状を呈する。規模は現存値で長軸 155cm、短軸 150cm、深さは 56cm を測り、主軸方向は N-11° -W を示す。覆土は、1・2 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体、3・4 層は七本桜軽石粒と赤褐色の今市スコリアを多量に含む。6・7 層は軽石、スコリアを含むローム質土となる。遺物は出土していない。

時期は、覆土が七本桜軽石、今市スコリアを主体とし、その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから、軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。

第173号土坑〔第17図, 図版2〕

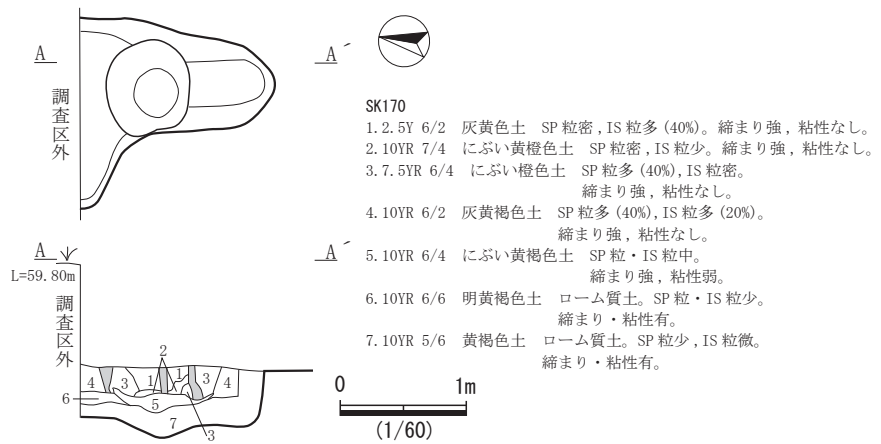
検出位置は4区中央部西寄りのC9・D9グリッドにまたがる。上部はトレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸154cm, 短軸145cm, 深さは56cmを測り、主軸方向はN-37°-Wを示す。覆土は、1～3層で白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体又は多量に含み、4層は赤褐色の今市スコリア粒を多量に含むローム質土である。遺物は出土していない。

時期は、覆土が七本桜軽石、今市スコリアを主体とし、その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから、軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。

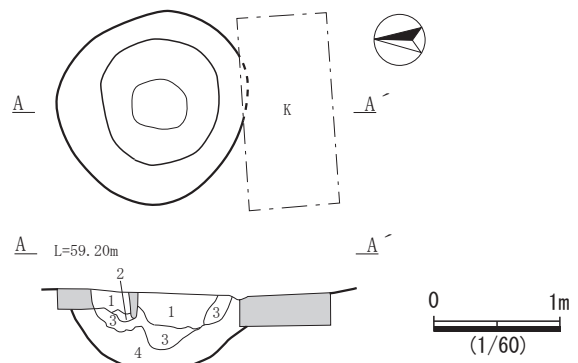
第183号土坑〔第18図, 図版2〕

検出位置は4区中央部東寄りのC13・D13グリッドにまたがる。上部はトレンチャーにより攪乱が著しい。重複遺構はない。平面形は円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸130cm, 短軸116cm, 深さは37cmを測り、主軸方向はN-30°-Eを示す。覆土は、1層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体とし、2層は七本桜軽石粒と赤褐色の今市スコリアを多量に含む。3・4層は軽石、スコリアを含むローム質土である。遺物は出土していない。

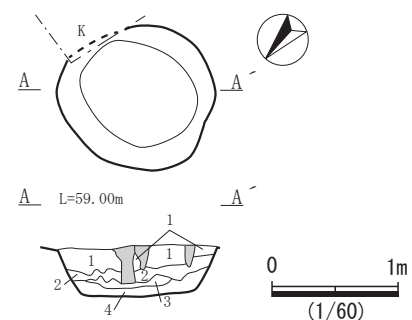
時期は、覆土が七本桜軽石、今市スコリアを主体とし、その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから、軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



第16図 第170号土坑



第17図 第173号土坑

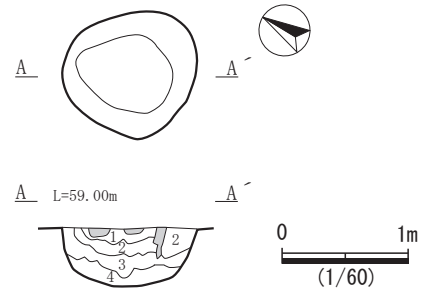


第18図 第183号土坑

第 184 号土坑 [第 19 図, 図版 2]

検出位置は 4 区西側の E6 グリッドである。上部はトレンチャーによりわずかに攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 110cm, 短軸 100cm, 深さは 45cm を測り, 主軸方向は N-40°-W を示す。覆土は, 1~3 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒と赤褐色の今市スコリア粒を多量に含み, 4 層は軽石粒を含むローム質土である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



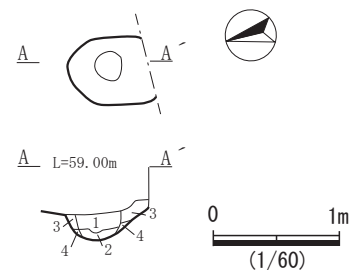
- SK184
1. 2.5YR 6/2 灰黄色土 SP 粒密, IS 粒多 (20%)。縮まり強, 粘性なし。
 2. 7.5YR 6/3 にぶい褐色土 SP 粒・IS 粒多 (40%)。縮まり強, 粘性なし。
 3. 7.5YR 5/3 にぶい褐色土 SP 粒多 (20%), IS 粒密。縮まり強, 粘性なし。
 4. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP 粒少, IS 粒中。縮まり・粘性有。

第 19 図 第 184 号土坑

第 185 号土坑 [第 20 図]

検出位置は 4 区西側の E7 グリッドである。重複遺構はない。平面形は楕円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 70cm, 短軸 57cm, 深さは 41cm を測り, 主軸方向は N-50°-E を示す。覆土は, 上層の 1・3 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒と赤褐色の今市スコリア粒を多量に含み, 下層の 2・4 層は両軽石粒を含むローム質土である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



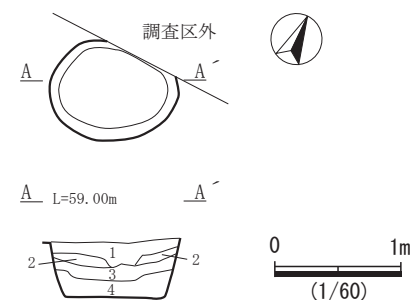
- SK185
1. 2.5YR 6/2 灰黄色土 SP 粒密, IS 粒少。縮まり強, 粘性なし。
 2. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP 粒中, IS 粒微。縮まり・粘性有。
 3. 10YR 6/2 灰黄褐色土 SP 粒・IS 粒多 (20%)。縮まり強, 粘性弱。
 4. 10YR 6/3 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP 粒微, IS 粒少。縮まり・粘性有。

第 20 図 第 185 号土坑

第 186 号土坑 [第 21 図]

検出位置は 4 区西側の D4 グリッドである。重複遺構はない。平面形は楕円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 104cm, 短軸が現存値で 75cm, 深さは 45cm を測り, 主軸方向は N-59°-E を示す。覆土は, 1 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒主体, 2 層は七本桜軽石粒と赤褐色の今市スコリア, 3 層以下が今市スコリア粒を多量に含む。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



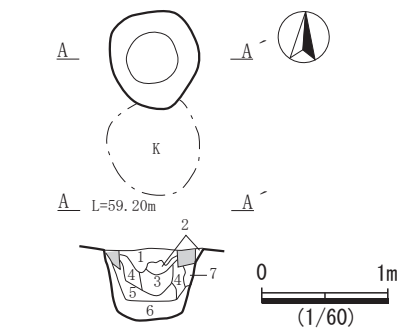
- SK186
1. 10YR 6/2 灰黄褐色土 SP 粒密, IS 粒多 (20%)。縮まり強, 粘性なし。
 2. 7.5YR 6/4 にぶい黄褐色土 SP 粒多 (40%), IS 粒密。縮まり強, 粘性なし。
 3. 7.5YR 5/6 明褐色土 SP 粒多 (20%), IS 粒密。縮まり強, 粘性弱。
 4. 5YR 4/6 赤褐色土 SP 粒少, IS 粒密。縮まり有, 粘性弱。

第 21 図 第 186 号土坑

第 187 号土坑 [第 22 図, 図版 2]

検出位置は 4 区中央部の C12 グリッドである。トレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 73cm, 短軸 70cm, 深さは 58cm を測り, 主軸方向は N-25°-W を示す。覆土は, 1~4 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体又は多量に含む層で, 5・6 層は同軽石粒を含むローム質土となり, 今市スコリアの含有量が比較的少ない。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



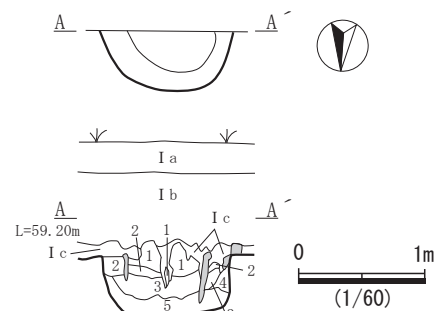
- SK187
1. 2.5Y 6/2 灰黄色土 粒状細かい SP 粒主体。IS 粒少。縮まり強, 粘性なし。
 2. 2.5Y 7/2 灰黄色土 粒状細かい SP 粒主体。IS 粒少。縮まり強, 粘性なし。
 3. 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 SP 粒多 (40%), IS 粒・塊状 IS 少。縮まり強, 粘性弱。
 4. 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 SP 粒多 (20%), IS 粒中。縮まり強, 粘性弱。
 5. 10YR 7/6 明黄褐色土 ローム質土。SP 粒・IS 粒中。縮まり・粘性有。
 6. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム質土。SP 粒少, IS 粒微。縮まり・粘性有。
 7. 5YR 4/6 赤褐色土 IS 粒主体。SP 粒微。縮まり強, 粘性なし。

第 22 図 第 187 号土坑

第 189 号土坑 [第 23 図, 図版 2]

検出位置は 4 区中央部の D11 グリッドである。トレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は円形とみられ, 断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 105cm, 短軸が現存値で 45cm, 深さは 46cm を測り, 主軸方向は N-78°-E を示す。覆土は, 1~3 層が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体又は多量に含み, 4 層は赤褐色の今市スコリアを多量に含む。5 層は両軽石粒・スコリアを含むローム質土となる。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石, 今市スコリアを主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



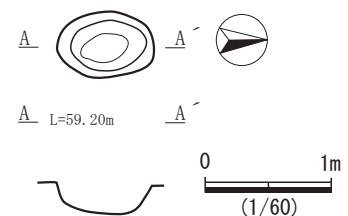
- SK189
1. 2.5Y 7/4 浅黄色土 粒状細かい SP 粒主体。IS 粒微。縮まり強, 粘性なし。
 2. 2.5YR 7/3 浅黄色土 SP 粒密, IS 粒少。縮まり強, 粘性なし。
 3. 10YR 7/3 にぶい黄橙色土 SP 粒多 (40%), IS 粒少。縮まり強, 粘性弱。
 4. 7.5YR 7/6 橙色土 SP 粒中, IP 粒多 (20%), 塊状 IS 少。縮まり強, 粘性なし。
 5. 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム質土。SP 粒・IS 粒中。縮まり・粘性有。

第 23 図 第 189 号土坑

第 190 号土坑 [第 24 図]

検出位置は 4 区西側中央部寄りの D8 グリッドである。トレンチャーにより一部攪乱を受ける。重複遺構はない。平面形は楕円形で, 断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 78cm, 短軸 55cm, 深さは 24cm を測り, 主軸方向は N-0° を示す。覆土は, 白色・浅黄色の七本桜軽石粒を主体とする単一層である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が七本桜軽石を主体とし, その軽石の土壌化があまり進んでいない状態であることから, 軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。

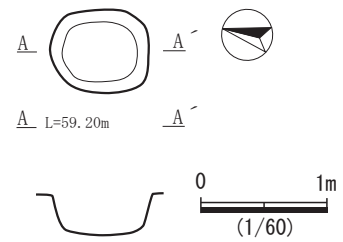


第 24 図 第 190 号土坑

第 191 号土坑 [第 25 図]

検出位置は 4 区西側の E3 グリッドである。重複遺構はない。平面形は楕円形で、断面は鍋底状を呈する。規模は長軸 78cm，短軸 65cm，深さは 34cm を測り，主軸方向は N-16°-W を示す。覆土は，白色・浅黄色の七本桜軽石粒を多量に含む単一層である。遺物は出土していない。

時期は，覆土が七本桜軽石，今市スコリアを主体とし，その軽石の土壤化があまり進んでいない状態であることから，軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。

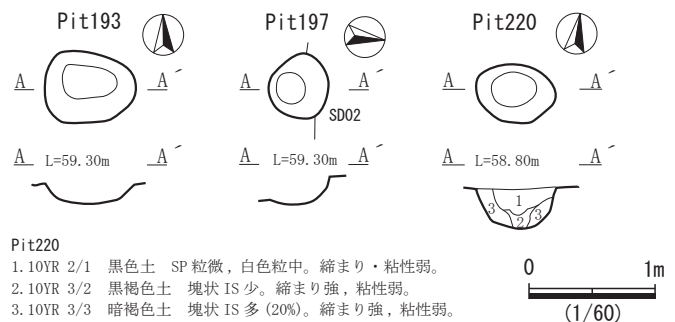


第 25 図 第 191 号土坑

ピット [第 26 図，表 2]

Pit193・197 は 5 区から，Pit220 は 4 区から検出された。いずれも遺物は出土していないが，覆土が白色・浅黄色の七本桜軽石粒を多量に含んでいることから，縄文時代草創期のピットと判断した。

規模等の詳細は一覧表（表 2）に記載した。



第 26 図 第 193, 197, 220 号ピット

表 2 ピット一覧表（縄文時代）

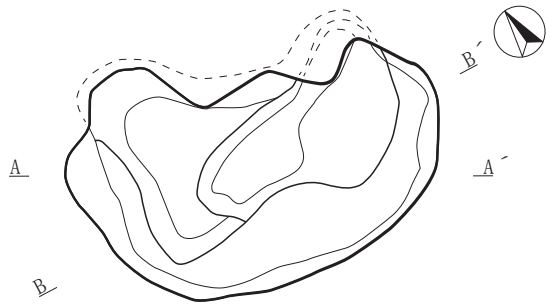
遺構名	位置 (グリッド)	形状	規模 (cm)			重複・覆土・特徴・その他	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ			
Pit193	C22	楕円	70	55	14	単層。暗灰黄色土(2.5Y5/2)SP主体。締り強，粘性弱。浅く，底部のみ残存か	なし	
Pit197	C21	円	50	48	22	単層。黒褐色土(10YR3/2)。斑状ISを多量含む。締りあり，粘性弱。SD06より古い。	なし	
Pit220	E4	楕円	63	45	33	3層分層(第26図)。	なし	

(3) その他

風倒木痕 [第 27 図，図版 2]

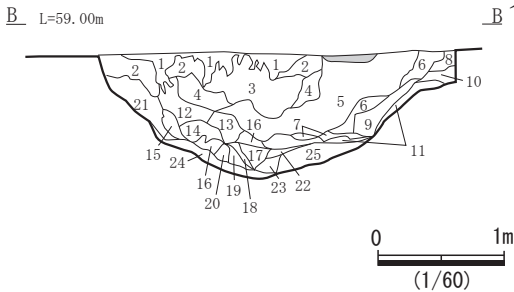
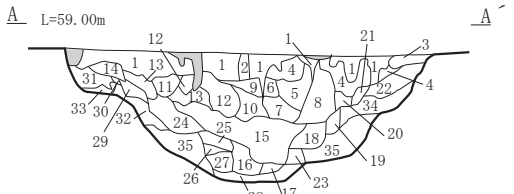
検出位置は 4 区西側の E5・E6 グリッドにまたがる地点である。重複遺構はない。馬蹄形状に広がり，断面は不整形である。規模は長軸 302cm，短軸 163cm，深さは 98～102cm を測り，主軸方向は N-67°-W を示す。土層は，白色・浅黄色の七本桜軽石粒，赤褐色の今市スコリア粒を多量に含む層と軽石，スコリアを含むローム質土が複雑に堆積した自然堆積である。上層にあたる A～A' の 12 層，B～B' の 3 層はローム質土を主体とし，層位の逆転現象が認められることから風倒木痕と判断した。A～A' の 4～8・15・18 層，B～B' の 4・5・12～14 層は暗灰黄色土，黄灰色土は七本桜軽石粒を多量に含み，非常に固く締まった層である。遺物は出土していない。

時期は，覆土が七本桜軽石，今市スコリアを主体とし，軽石の土壤化があまり進んでいない状態であることから，軽石の降灰時期からさほど期間を隔てない縄文時代草創期が想定される。



SX01 (A~A')

1. 2.5Y 3/1 黒褐色土 SP粒多(20%)。縮まり強, 粘性なし。
2. 2.5Y 7/3 浅黄色土 SP粒密, IS粒多(20%)。縮まり強, 粘性なし。
3. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土 SP粒中, IS粒多(20%)。縮まり強, 粘性なし。
4. 2.5Y 6/3 にぶい黄色土 SP粒密, IS粒中。縮まり非常に強, 粘性なし。
5. 2.5Y 4/2 暗灰黄色土 SP粒多(40%), IS粒少。縮まり非常に強, 粘性なし。
6. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土 SP粒多(20%), IS粒・黒色粒微。縮まり非常に強, 粘性なし。
7. 2.5Y 4/1 黄灰色土 SP粒多(30%), IS粒中。縮まり非常に強, 粘性なし。
8. 2.5Y 4/1 黄灰色土 SP粒多(40%), IS粒中, 塊状IS少。縮まり非常に強, 粘性なし。
9. 2.5Y 6/3 にぶい黄色土 暗灰黄色土(2.5YR5/2)混土。SP粒中, 塊状IS多(20%)。縮まり強, 粘性弱。
10. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 SP粒・塊状IS多(30%)。縮まり強, 粘性弱。
11. 10YR 6/3 にぶい黄褐色土 暗灰黄色土(2.5YR5/2)混土。SP粒・IS粒多(40%)。縮まり強, 粘性弱。
12. 7.5YR 6/4 にぶい橙色土 ローム質土。SP粒・IS粒中, 塊状IS少。縮まり・粘性有。
13. 10YR 6/2 灰黄褐色土 SP粒・IS粒多(20%), 塊状IS少中。縮まり強, 粘性弱。
14. 7.5YR 6/2 灰褐色土 SP粒少, 塊状IS多(20%)。縮まり強, 粘性弱。
15. 2.5Y 4/1 黄灰色土 SP粒・IS粒多(20%)。縮まり非常に強, 粘性弱。
16. 2.5Y 5/1 黄灰色土 SP粒微, 塊状IS多(40%), ロームブロック(φ5~20mm)多(20%)。縮まり非常に強, 粘性弱。
17. 2.5Y 6/2 灰黄色土 SP粒少, IS粒微, ロームブロック(φ2~5mm)少。縮まり・粘性有。
18. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土 SP粒中, IS粒少, 黒色粒微。縮まり非常に強, 粘性弱。
19. 2.5Y 5/1 黄灰色土 SP粒多(40%), IS粒少。縮まり非常に強, 粘性なし。
20. 10YR 5/2 灰黄褐色土 SP粒多(20%), 塊状IS中。縮まり強, 粘性弱。
21. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 SP粒多(20%), IS粒少。縮まり強, 粘性弱。
22. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 SP粒密, IS粒多(40%)。縮まり強, 粘性弱。
23. 2.5YR 7/3 浅黄色土 粒状粗いSP粒主体。IS粒中。縮まり弱, 粘性なし。
24. 5YR 5/6 明赤褐色土 ISにローム土の混土。SP粒少。縮まり・粘性有。
25. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP粒微, 塊状IS少。縮まり弱, 粘性強。
26. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP粒・IS粒少。縮まり弱, 粘性強。
27. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP粒少, IS粒微。縮まり弱, 粘性強。
28. 5YR 4/6 赤褐色土 粒状細かいSP粒主体。ローム土少。縮まり弱, 粘性強。
29. 7.5YR 6/3 にぶい褐色土 ローム質土。SP粒中, IS粒多(20%)。縮まり有, 粘性弱。
30. 7.5YR 6/4 にぶい橙色土 ローム質土。IS粒中。縮まり・粘性有。
31. 7.5YR 5/6 明褐色土 ISにローム土混土。攪乱が入る。縮まり弱, 粘性有。
32. 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP粒微, IS粒少。縮まり弱, 粘性強。
33. 7.5YR 6/6 橙色土 ローム質土。IS粒多(20%), 塊状IS少中。縮まり弱, 粘性強。
34. 7.5YR 5/4 にぶい褐色土 SP粒・塊状IS多(40%)。縮まり有, 粘性弱。
35. 10YR 7/3 にぶい黄褐色土 ローム質土。SP粒微, IS粒・黒色粒少。縮まり有, 粘性弱。



SX01 (B~B')

1. A~A' 1層と同質。
2. A~A' 4層と同質。
3. A~A' 12層と同質。
4. A~A' 13層と同質。
5. A~A' 15層と同質。
6. 2.5YR 6/3 にぶい黄色土 SP粒多(40%), 塊状IS中。縮まり有, 粘性弱。
7. A~A' 28層と同質。
8. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 SP粒多(20%), IS粒多(40%)。縮まり有, 粘性なし。
9. 5YR 4/6 赤褐色土 粒状細かいIS粒主体。粒状細かいSP粒中。縮まり有, 粘性弱。
10. 5YR 5/6 明赤褐色土 SP粒少。縮まり強, 粘性弱。
11. A~A' 25層と同質。
12. A~A' 8層と同質。
13. 10YR 5/2 灰黄褐色土 SP粒多(20%), 塊状IS多(40%)。縮まり非常に強, 粘性なし。
14. A~A' 1層と同質。
15. 2.5Y 6/2 灰黄色土 粒状粗いSP粒密, IS粒中。縮まり非常に強, 粘性なし。
16. 5YR 4/8 赤褐色土 粒状細かいIS粒主体。SP粒少。縮まり有, 粘性弱。
17. A~A' 16層と同質。
18. 10YR 5/2 灰黄褐色土 SP粒少, IS粒密。縮まり有, 粘性弱。
19. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土 SP粒中, IS粒多(20%)。縮まり非常に強, 粘性なし。
20. 2.5Y 7/4 浅黄色土 粒状粗いIS粒主体。IS粒多(30%)。縮まり弱, 粘性なし。
21. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 ISにローム土混土。斑状の黒色土多(20%)。縮まり・粘性有。
22. A~A' 26層と同質。
23. A~A' 27層と同質。
24. A~A' 28層と同質。
25. A~A' 36層と同質。

第27図 風倒木痕

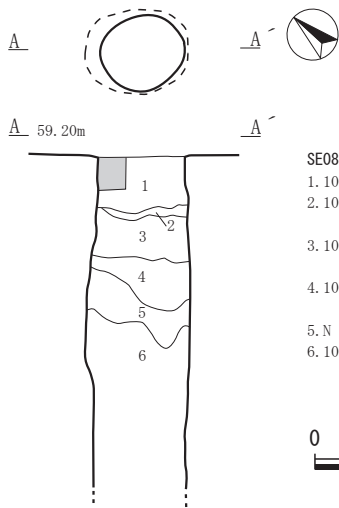
2 近世

(1) 井戸跡

第8号井戸跡 [第28図, 図版3]

検出位置は4区東側のB16グリッドである。重複遺構はない。平面形は円形, 断面は筒状を呈しているが, 壁面が若干外側に膨らむ。規模は長軸66cm, 短軸60cmで, 深さは260cmまで掘り下げたが, 湧水したため安全上完掘を断念した。覆土は黒色土中にロームブロック, 塊状になった今市スコリア, 灰白色粘土ブロックを多量に含んだ人為堆積で, 全体に縮りが非常に弱い。遺物は出土せず, 礫も含まれなかった。

時期は, 形態や覆土がSE09と類似することから, ほぼ同時期の17世紀後半~18世紀初頭の所産と考えられる。



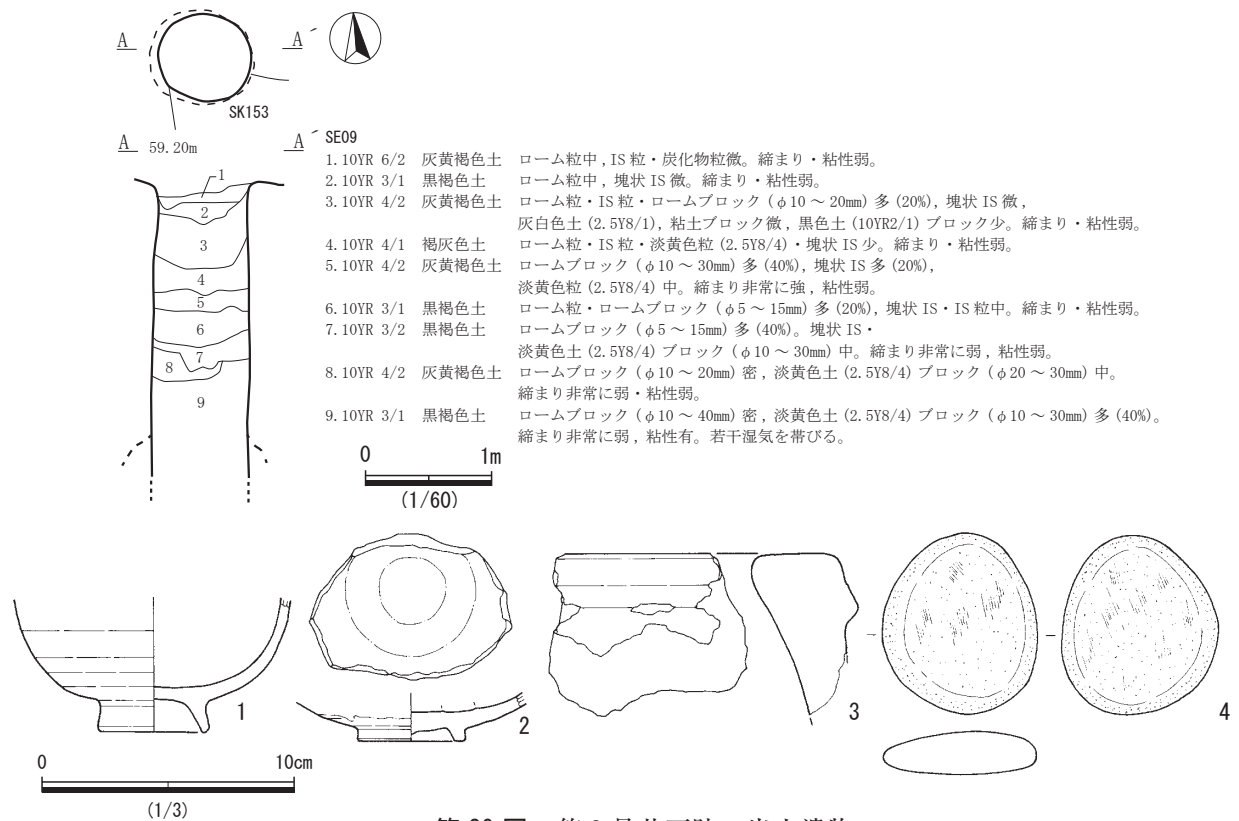
- SE08
1. 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロック (φ2～15mm)・SP粒中, IS粒少。縮まり・粘性弱。
 2. 10YR 2/1 黒色土 ロームブロック (φ5～10mm)多 (20%), 塊状KP密, 灰白色 (2.5Y8/1) 粘土ブロック (φ5～20mm)少。縮まり・粘性弱。
 3. 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロック (φ5～15mm)多 (20%), 塊状KP・IS中。灰白色 (2.5Y8/1) 粘土ブロック (φ5～10mm)少。縮まり・粘性弱。
 4. 10YR 2/1 黒色土 ロームブロック (φ2～5mm)中。塊状IS多 (20%), 灰白色 (2.5Y8/1) 粘土ブロック (φ2～10mm)中。縮まり有, 粘性弱。
 5. N 1.5/ 黒色土 ロームブロック (φ2～5mm)多 (20%), 塊状IS中, KP粒少。縮まり・粘性弱。
 6. 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックと塊状になったIS, KPが密に混在。縮まり非常に強, 粘性有。若干湿気を帯びる。

第28図 第8号井戸跡

第9号井戸跡 [第29図, 表3, 図版3・4]

検出位置は5区東側のC23グリッド地点である。SK153と重複し、本遺構が古い。平面形は円形、断面は筒状を呈する。規模は長軸74cm、短軸68cmで、深さは235cmまで掘り下げたが、湧水したため安全上完掘を断念した。覆土は灰黄褐色土と黒褐色土の互層で、ロームブロック、塊状になった今市スコリア、灰白色粘土ブロックを多量に含んだ人為堆積である。全体に縮りが非常に弱い。遺物は図示した陶器の碗1、皿2、瓦質土器の火鉢3、不明石製品4が出土している。ほかに土師質土器・壺の破片が出土しており、こちらは、SD06出土の壺8と類似した胎土である。

時期は、出土遺物から17世紀後半～18世紀初頭の所産と考えられる。



第29図 第9号井戸跡・出土遺物

表3 第9号井戸跡出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
SE09	1	陶器 丸碗	— (5.3) 4.2	50%存,内外面全体に灰釉で貫入が目立つ。量付のみ露胎。瀬戸美濃系か。	黒色粒	5Y6/2灰オリーブ	良好	17世紀後半 ～18世紀初頭
SE09	2	陶器 皿	— (1.9) 4.2	体部～底部,20%存。削り出し高台。体部下端から高台内は露胎。見込みは蛇の目割ぎ釉。釉の色調は一様ではなく,青緑釉が被熱により変色か,肥前系。	黒色粒少	胎土:2.5Y5/2暗灰黄 外釉:5Y6/4オリーブ黄 内釉:7.5Y4/3暗オリーブ	良好	17世紀後半 ～18世紀初頭
SE09	3	瓦質土器 火鉢	— (6.4) —	口縁部片。口唇部面取り。内外面ヨコナデ。	石英多,長石多	5Y7/1灰白	普通	
SE09	4	石製品 不明	—	全長:7.1cm 幅:6.1cm 厚さ:1.7cm 重量:111.4g 石材:安山岩 表裏面に擦痕あり。				

(2) 溝跡

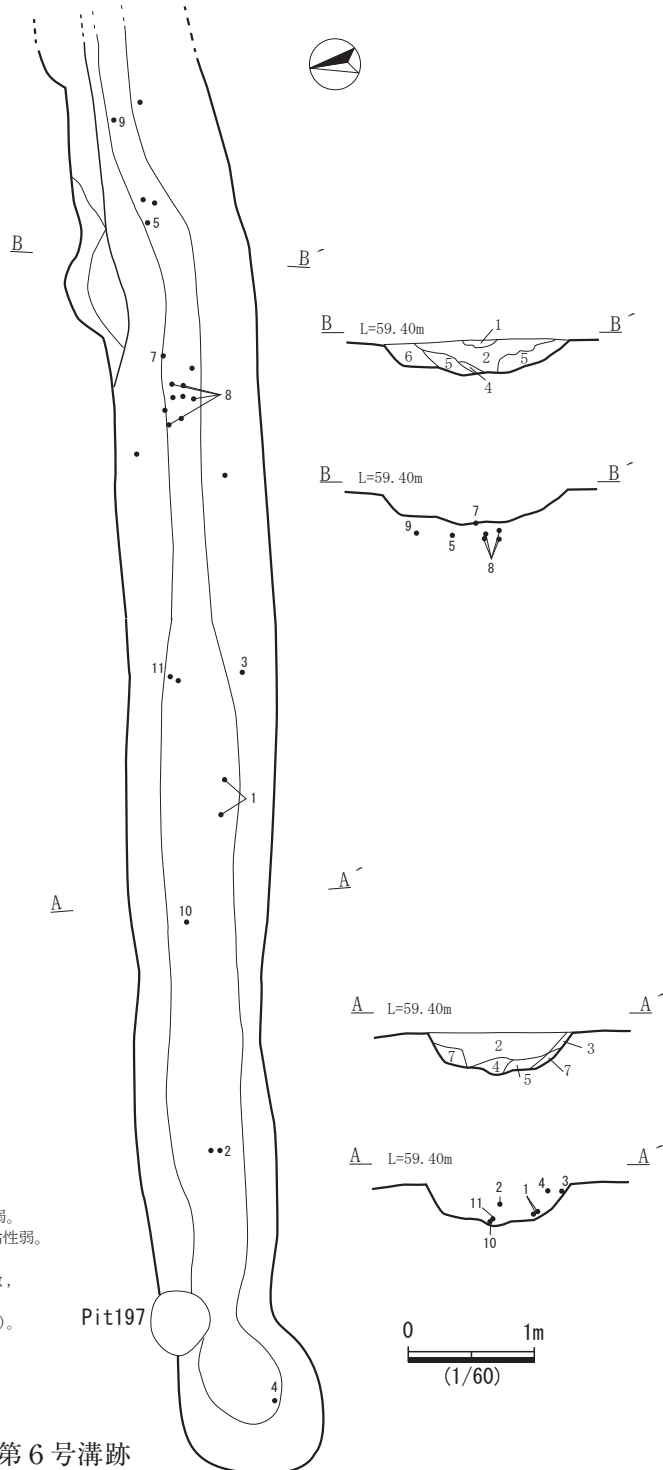
第6号溝跡 [第30・31図, 表4, 図版3・4]

検出位置は5区のC21～23グリッドである。東側でSK150～153, 163, 181, Pit197と重複し,本遺構が最も新しいとみられるが,切り合いが複雑で新旧関係は判然としなかった。断面は半月状を呈し,規模は全長が現存値で1,160cm,幅75～127cm,深さ26～35cmである。走行方向はN-85°-Eを示し,ほぼ直線的に延びる。SK150～153を切り込んでいたとしても,東端までは達していないようである。覆土は灰黄褐色土・黒褐色土を主体とした人為堆積である。遺物は,図示した陶器の碗・播鉢・茶入,磁器の染付碗,土師質土器の壺・土鍋,瓦質土器の土鍋・香炉や硯と思われる石製品など,陶磁器・土器・石製品を合わせて37点が出土した。SK181直上では土師質土器・壺8の破片が集中している。

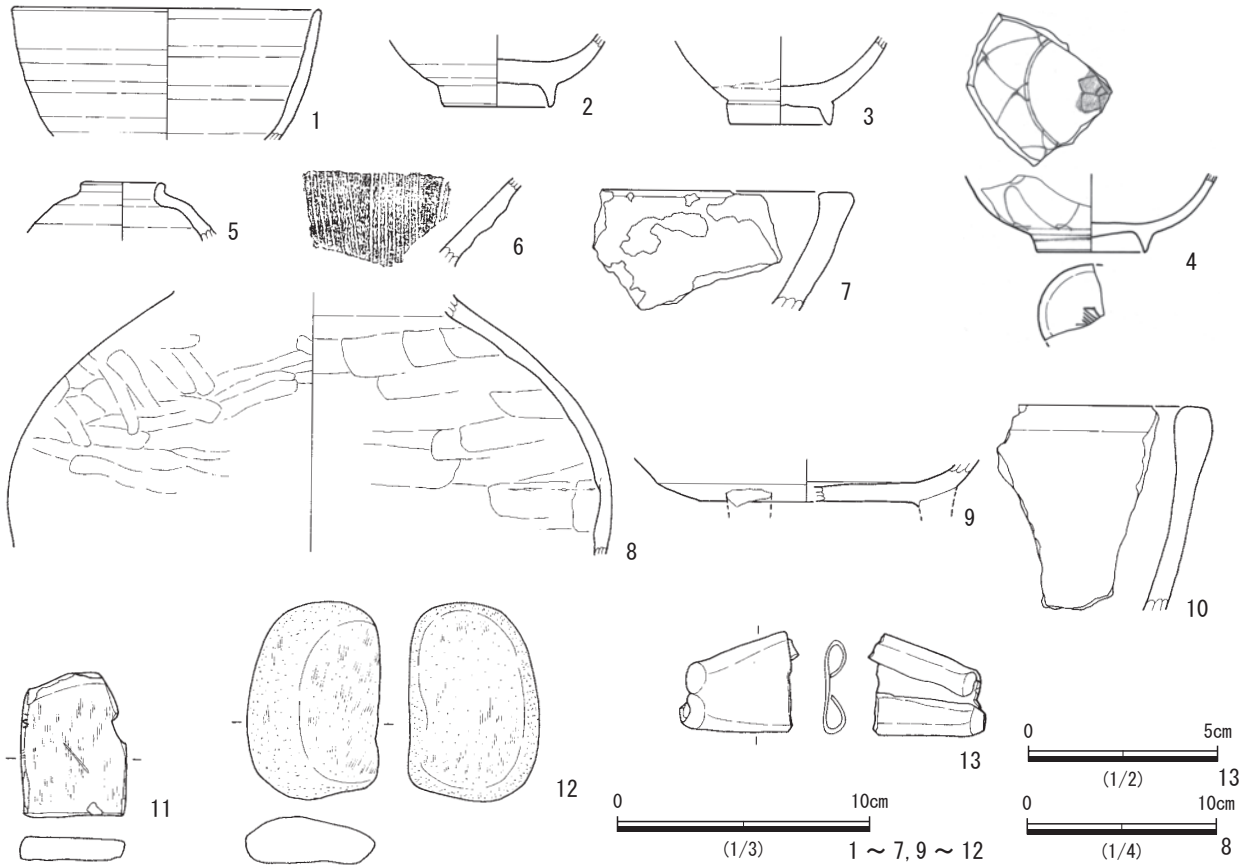
時期は,出土遺物から18世紀代の所産と考えられる。

SD06

1. 10YR 4/2 灰黄褐色土 SP粒多(20%),IS粒少。縮まり有,粘性弱。
2. 10YR 3/1 黒褐色土 ローム粒・SP粒少,IS粒微。縮まり有,粘性弱。
3. 10YR 3/2 黒褐色土 SP粒中,IS粒少。縮まり有,粘性弱。
4. 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒中,ロームブロック(φ2～5mm)微,IS粒微。縮まり有,粘性弱。
5. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ5～20mm)多(40%)。縮まり・粘性有。
6. 10YR 3/1 黒褐色土 塊状IS密。縮まり有,粘性弱。
7. 10YR 4/2 灰黄褐色土 塊状IS密,黒色土(10YR2/1)多(20%)。縮まり有,粘性弱。



第30図 第6号溝跡



第31図 第6号溝跡出土遺物

表4 第6号溝跡出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
SD06	1	陶器 碗	(11.9) (5.2) —	口縁部～体部片。内外面鉄釉。腰部以下露胎。瀬戸美濃系。	黒色粒, 白色粒	7.5YR4/3褐	良好	
SD06	2	陶器 碗	— (2.8) 4.3	体部～底部。20～30%存。内外面灰釉による刷毛目。見込みに目跡2カ所あり。唐津製品。	黒色粒微	2.5Y6/2灰黄	良好	18世紀代
SD06	3	磁器 碗	— (3.5) 4.0	体部～底部。20%存。外面底部下端から高台内の畳付を除いた部分に鉄釉を重ね掛け。見込みに離れ砂付着。肥前系。	石英微, 黒色粒	外: 2.5Y7/2灰黄 内: 10Y8/1灰白	良好	
SD06	4	陶器 碗	— (3.1) (4.2)	体部～底部。20%存。染付は体部外面・見込みに網目文と圏線。高台脇に二重圏線。見込み中央と高台内中央に文様。畳付に離れ砂付着。肥前系。	黒色粒	N8/ 灰白	良好	17世紀後半 ～18世紀前半
SD06	5	陶器 茶入	(3.0) (2.3) —	口縁部～体部片。内外面鉄釉で内面に付着物あり。瀬戸美濃系。	黒色粒, 透明粒微	7.5YR5/2灰褐	良好	18世紀半ば
SD06	6	陶器 播鉢	(3.4) — —	体部片。内外面鉄釉。内面は7条1単位の播目。丹波製品か。	石英, 長石, 白色粒	外: 5YR4/3にぶい赤褐 内: 5YR3/3暗赤褐	良好	
SD06	7	土師質土器 土鍋	(4.7) — —	口縁部～体部。口唇部面取り。内外面ヨコナデ。	白色粒	5Y2/1黒	普通	
SD06	8	土師質土器 甕	(13.7) — —	体部上半。20～30%存。外面は不定方向のヘラナデ。内面は横方向のヘラナデ。在地産。	石英(大粒)多, 金雲母多	外: 7.5YR5/4にぶい褐 内: 5YR5/4にぶい赤褐	普通	
SD06	9	瓦質土器 香炉	(1.9) (8.6) —	ロクロ成形。体部下端ヘラナデで脚部を貼り付け後周縁部をナデ。	石英少, 長石少, チャート, 白色粒	N4/ 灰	良好	
SD06	10	瓦質土器 土鍋	(8.1) — —	口縁部～体部片。内外面ヨコナデ。外面に煤付着。	石英多, 長石, チャート少	外: 10YR3/1黒褐 内: 5Y4/1灰	良好	
SD06	11	石製品 硯か	— — —	全長: 5.7cm 幅: 4.1cm 厚さ: 1.0cm 重量: 37.0g 石材: 粘板岩 片面欠失。				
SD06	12	石製品 不明	— — —	全長: 7.8cm 幅: 5.2cm 厚さ: 1.8cm 重量: 118.2g 石材: 安山岩 表裏面に擦痕あり。				
SD06	13	銅製品 不明	— — —	全長: 3.1cm 幅: 2.7cm 厚さ: 0.6cm 重量: 8.0g 材質: 銅 筒形棒状だったものが押し潰されている。煙管か。				

(3) 土坑・ピット

第 144 号土坑 [第 32 図, 図版 3]

検出位置は 5 区東端の C24 グリッドである。南東側は調査区外に延びる。SK145・146 と重複し、SK145 より古く、SK146 より新しい。平面形は方形とみられ、断面形は箱状を呈する。規模は現存値で長軸 112cm, 短軸 75cm, 深さは 39cm を測り、主軸方向は N-85°-W を示す。覆土は小粒のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

時期は、覆土が SK150・151 と類似することから、17 世紀末～18 世紀前半の可能性が考えられる。

第 145 号土坑 [第 32 図, 図版 3]

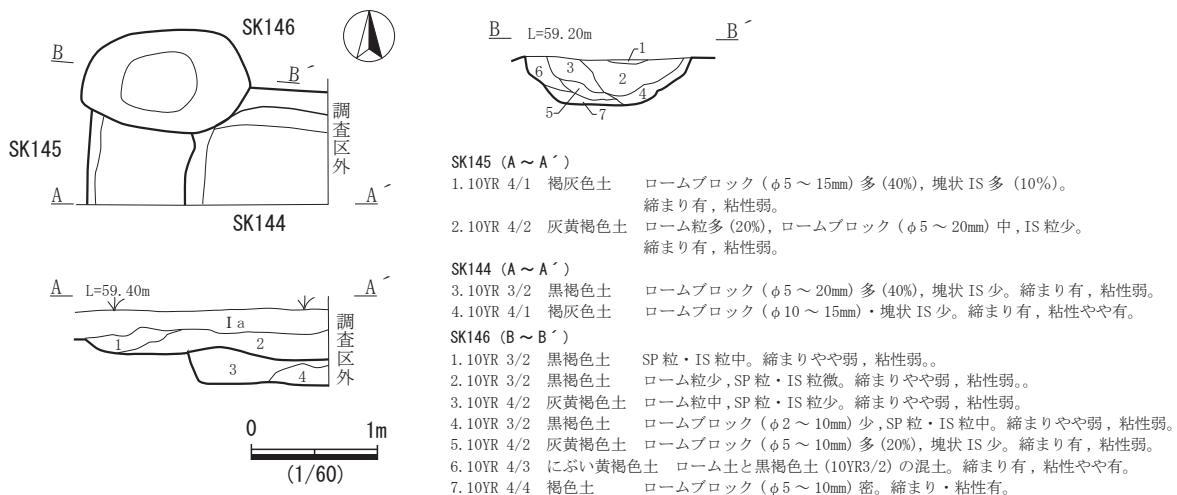
検出位置は 5 区東端の C23・C24 グリッドにまたがる。南東側は調査区外に延びる。SK144・146 と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は方形又は長方形とみられ、断面形は箱状を呈する。規模は現存値で長軸 190cm, 短軸 90cm, 深さは 14cm を測り、主軸方向は N-85°-W を示す。覆土は小粒のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

時期は、覆土が SK150・151 と類似することから、17 世紀末～18 世紀前半の可能性が考えられる。

第 146 号土坑 [第 32 図, 図版 3]

検出位置は 5 区東端の C23・C24 グリッドにまたがる。南東側は調査区外に延びる。SK144・145 と重複し、本遺構が最も古い。平面形は楕円形で、断面形は鍋底状を呈する。規模は現存値で長軸 134cm, 短軸 80cm, 深さは 40cm を測り、主軸方向は N-85°-W を示す。覆土は褐灰色土の単一層で、小粒のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積である。遺物は出土していない。

時期は、覆土が SK150・151 と類似することから、17 世紀末～18 世紀前半の可能性が考えられる。

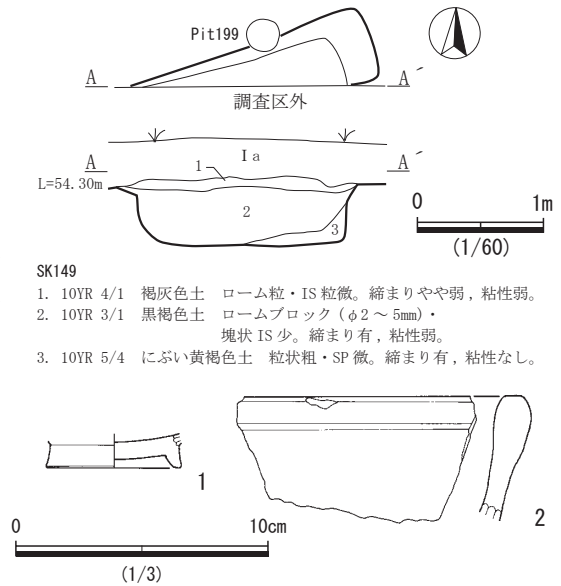


第 32 図 第 144 ~ 146 号土坑

第 149 号土坑 [第 33 図, 表 5, 図版 4]

検出位置は 5 区西側の C20・D20・C21 グリッドにまたがる。南側は調査区外に延びる。Pit199 と重複し、本遺構が古い。平面形は長方形とみられ、断面形は箱状を呈し、北東壁は斜めに立ち上がる。規模は現存値で長軸 190cm, 短軸 60cm, 深さは 46cm を測り、主軸方向は N-69°-E を示す。覆土は黒褐色土が主体で、小粒のロームブロックや塊状の今市スコリアを少量含む人為堆積と考えられる。遺物は、図示した陶器の碗 1, 瓦質土器の土鍋 2 が出土している。碗は瀬戸美濃系の天目茶碗か。瓦質土器は煤が付着することから内耳鍋の可能性はある。

時期は、出土遺物から 18 世紀代の所産と考えられる。



第 33 図 第 149 号土坑・出土遺物

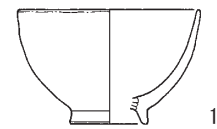
表 5 第 149 号土坑出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
SK149	1	陶器碗	(1.4) 5.2	底部片。底面は回転ヘラケズリ。内外面鉄釉で、外面高台部から底面は薄い錆釉。瀬戸美濃系天目茶碗か。	白色砂礫少, 黑色粒	外: 7.5YR5/4 にぶい褐 内: 7.5YR2/1 黒	良好	18 世紀代
SK149	2	瓦質土器土鍋	(4.9) —	口縁部片。内外面ヨコナデで、外面には沈線状の横線。外面に煤付着。	白色砂礫, 白色・透明砂粒	外: 10YR3/1 黒褐 内: 2.5Y4/1 黄灰	良好	SD06・10 と同一か

第 150 号土坑 [第 34・35 図, 表 6, 図版 3・4]

検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。SK151・154・155 と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は長方形で、断面形は箱状を呈する。規模は長軸 125cm, 短軸 74cm, 深さは 70cm を測り、主軸方向は N-80°-W を示す。覆土は灰黄褐色土の単一層で、小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積である。遺物は、図示した磁器の小杯 1 のほか、土師質土器・瓦質土器の小破片が出土している。小杯は口唇部が鉄釉で縁取られている。

時期は、出土遺物から 17 世紀末～18 世紀前半の所産と考えられる。



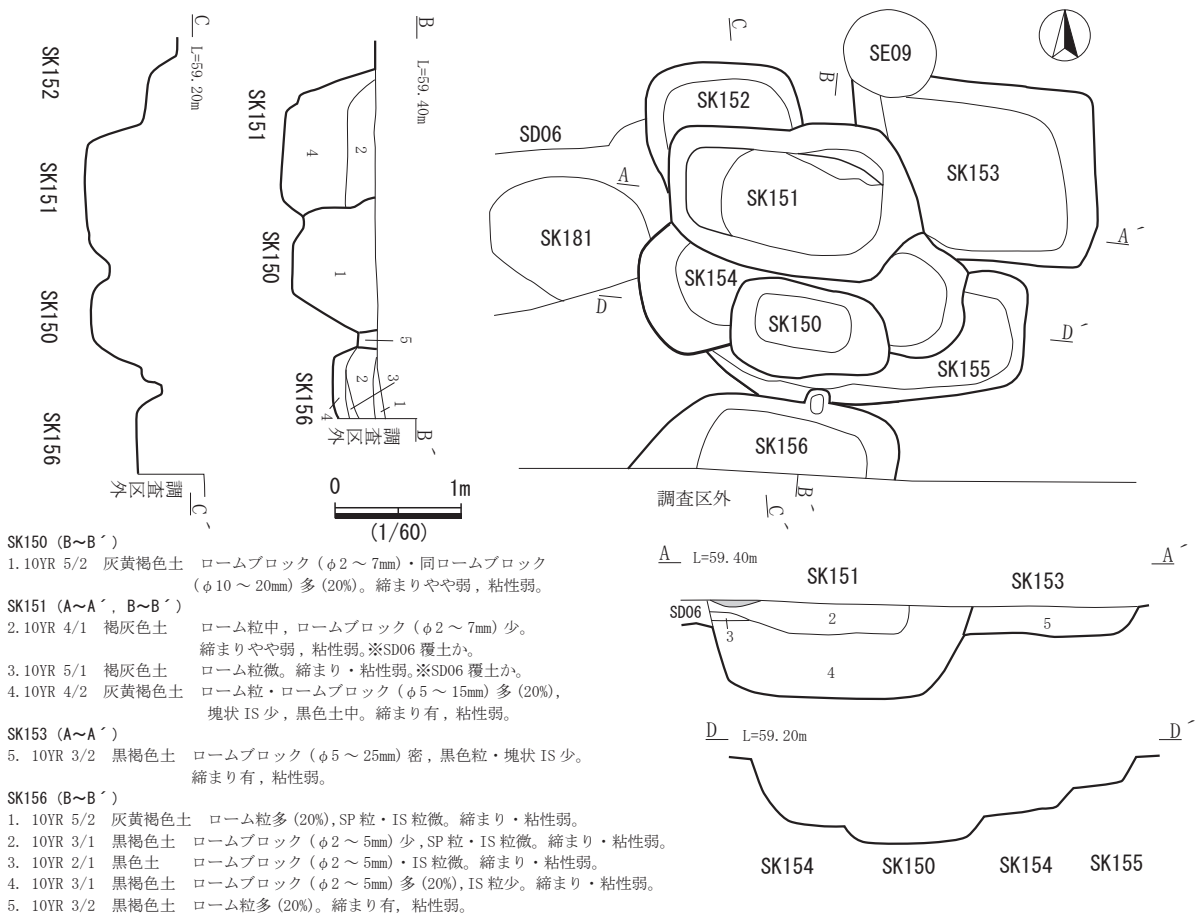
第 34 図 第 150 号土坑出土遺物

表 6 第 150 号土坑出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
SK150	1	磁器小杯	(7.0) 4.5 (3.0)	口縁部～底部。20% 存。口唇部に鉄釉を施す。畳付は露胎。肥前系。	白色粒微, 黑色粒	N8/ 灰白	良好	17 世紀末

第 151 号土坑 [第 35・36 図, 表 7, 図版 3・4]

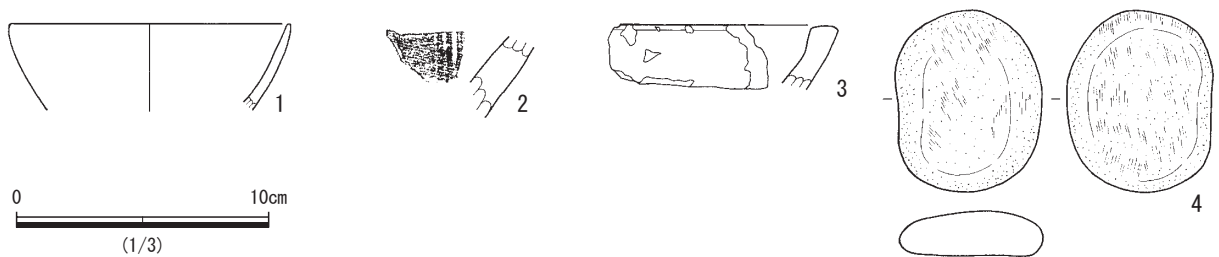
検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。SK150・152～154, SD06 と重複し、SK150, SD06 より古い。SK152～154 との新旧関係は把握できなかった。平面形は長方形で、断面形は箱状を呈し、底部西側際がわずかにスロープ状となる。規模は長軸 200cm, 短軸 120cm, 深さは 73cm を測り、主軸方向は N-80°-W を示す。覆土は灰黄褐色土の単一層で、小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積で



第 35 図 第 150 ~ 156 号土坑

ある。遺物は、図示した陶器の碗 1・挿鉢 2, 土師質土器の焙烙と思われる土鍋類 3, 不明石製品 4 のほか、磁器の染付碗, 器種不明の土師質土器, 石製品の砥石など小破片が出土している。

時期は、出土遺物から 17 世紀末~18 世紀前半の所産と考えられる。



第 36 図 第 151 号土坑出土遺物

表 7 第 151 号土坑出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
SK151	1	陶器碗	(11.0) (3.4) —	口縁部~体部片。内外面灰釉による刷毛目。唐津製品	褐色粒微, 黒色粒微	2.5Y5/2暗灰黄	良好	18世紀代
SK151	2	陶器挿鉢	(3.1) —	体部片, 播目は摩耗顕著。内外面鉄釉で外面一部が露胎。瀬戸美濃系。	白色砂礫, 黒色粒	5YR3/4暗赤褐	良好	17世紀代後半~18世紀代
SK151	3	土師質土器焙烙	(2.6) —	口縁部片, 口唇部面取り。内外面ヨコナデ。煤付着。	白色粒, 赤色粒 角閃石・輝石類 針状物	10YR3/1黒褐	良好	
SK151	4	石製品不明		全長:7.2cm 幅:5.8cm 厚さ:1.8cm 重量:119.8g 石材:砂岩 全体に擦痕顕著。				

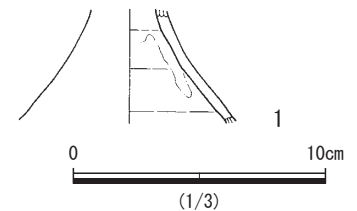
第 152 号土坑 [第 35 図, 図版 3]

検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。SK151, SD06 と重複し, SD06 より古い, SK151 との新旧関係は把握できなかった。平面形は方形とみられ, 断面形は箱状を呈する。規模は長軸 125cm, 短軸が現存値で 60cm, 深さは 27cm を測り, 主軸方向は N-88°-E を示す。覆土は灰黄褐色土の単一層で, 小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が SK150・151 と類似することから, 17 世紀末～18 世紀前半の可能性が考えられる。

第 153 号土坑 [第 35・37 図, 表 8, 図版 3・4]

検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。SK151, SE09 と重複し, SE09 より新しいが, SK151 との新旧関係は把握できなかった。平面形は方形で, 断面形は箱状を呈する。規模は長軸が現存値で 170cm, 短軸 140cm, 深さは 26cm を測り, 主軸方向は N-85°-W を示す。覆土は灰黄褐色土の単一層で, 小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積である。遺物は, 図示した陶器の徳利が出土している。



第 37 図 第 153 号土坑出土遺物

時期は, 覆土が SK150・151 と類似することから 17 世紀末～18 世紀前半とみられるが, 出土遺物は 19 世紀前半頃のものと思われ, 判然としない。

表 8 第 153 号土坑出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
SK153	1	陶器 徳利	— (4.4) —	頸部～体部片。ロクロ成形。外面は灰釉による刷毛目で貫入が目立つ。内面は頸部に鉄釉がかかり, 体部は露胎。瀬戸美濃系又は信楽焼か。	黒色粒少	外:2.5Y6/2灰黄 内:5Y7/2灰白	良好	19世紀代前半か

第 154 号土坑 [第 35 図, 図版 3]

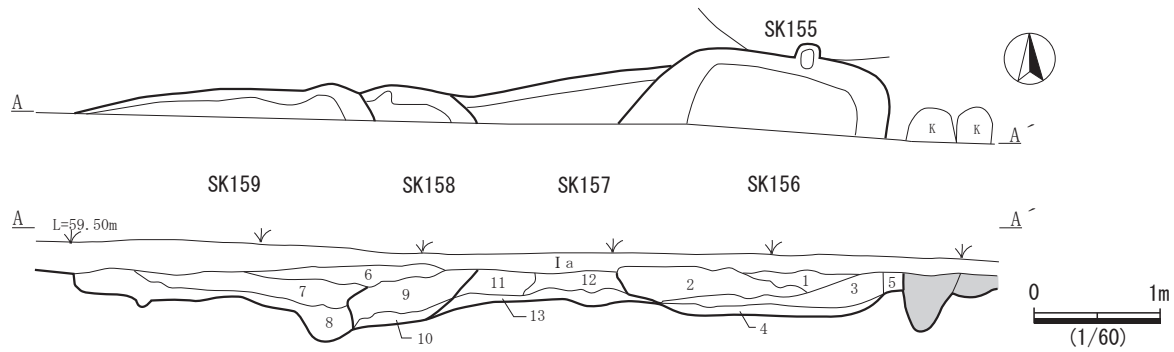
検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。SK150・151・155, SD06 と重複し, SD06 より古い, SK150・151・155 との新旧関係は把握できなかった。平面形は長方形で, 断面形は箱状を呈する。規模は長軸 260cm, 短軸が現存値で 100cm, 深さは 61cm を測り, 主軸方向は N-85°-W を示す。覆土は灰黄褐色土の単一層で, 小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が SK150・151 と類似することから, 17 世紀末～18 世紀前半の可能性が考えられる。

第 155 号土坑 [第 35 図, 図版 3]

検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。SK150・154 と重複するが, 両遺構との新旧関係は把握できなかった。平面形は長方形, 断面形は箱状を呈するとみられるが少し歪む。規模は, 長軸が 250cm, 短軸が 95cm, 深さは 29cm を測り, 主軸方向は N-87°-E を示す。覆土は灰黄褐色土の単一層で, 小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が SK150・151 と類似することから, 17 世紀末～18 世紀前半の可能性が考えられる。



- SK156**
- 10YR 5/2 灰黄褐色土 ローム粒多(10%), SP粒・IS粒微。縮まり・粘性弱。
 - 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロック(φ2~5mm)少, SP粒・IS粒微。縮まり・粘性弱。
 - 10YR 2/1 黒色土 ロームブロック(φ2~5mm)・IS粒微。縮まり・粘性弱。
 - 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロック(φ2~5mm)多(20%), IS粒微。縮まり・粘性弱。
 - 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ローム粒中, IS粒少。縮まり有, 粘性弱。
- SK158**
- 10YR 4/2 灰黄褐色土 ロームブロック(φ5~10mm)・SP粒中, IS粒少。縮まり・粘性弱。
 - 10YR 2/1 黒色土 ロームブロック(φ2~7mm)少。縮まり・粘性弱。
 - 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロック(φ2~10mm)多(20%), IS粒少。縮まり・粘性弱。
- SK159**
- 10YR 2/1 黒色土 ローム粒微, IS粒微。縮まり・粘性有。
 - 10YR 3/2 黒褐色土 ロームブロック(φ5~10mm)多(20%), 塊状IS中。縮まり・粘性弱。
- SK157**
- 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロック(φ2~7mm)少。縮まり有, 粘性弱。
 - 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロック(φ2~10mm)中, 塊状IS中。縮まり有, 粘性弱。
 - 10YR 3/2 黒褐色土 ローム土, ISの混土。縮まり有, 粘性やや有。

第 38 図 第 156 ~ 159 号土坑

第 156 号土坑 [第 38 図, 図版 3]

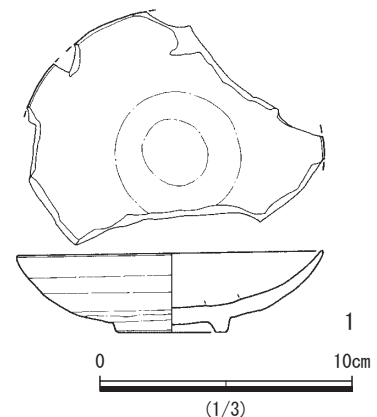
検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。南側は調査区外に延びる。SK157 と重複し、本遺構が新しい。平面形は方形又は長方形とみられ、断面形は箱状を呈する。規模は長軸 210cm, 短軸が現存値で 60cm, 深さは 34cm を測り、主軸方向は N-85°-W を示す。覆土は、黒色土・黒褐色土主体のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は剥片 1 点(第 55 図 2)が出土した。

時期は、覆土が SK157 と類似することから、17 世紀後半～18 世紀初頭の可能性が考えられる。

第 157 号土坑 [第 38・39 図, 表 9, 図版 4]

検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。南側の大部分は調査区外に延びる。SK156・158 と重複し、本遺構が最も古い。平面形は方形又は長方形とみられ、断面形は箱状を呈すると思われる。深さは 23cm であるが、平面規模や主軸方向は把握できなかった。覆土は、黒褐色土主体のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は、図示した陶器の皿 1 が出土している。同様の皿は近接する SE09 から出土しており、関連性が高いと思われる。

時期は、出土遺物から 17 世紀後半～18 世紀初頭の所産と考えられる。



第 39 図 第 157 号土坑出土遺物

表 9 第 157 号土坑出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類器種	口径器高底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
SK157	1	陶器皿	(12.0) (3.1) 4.4	60%存. 削り出し高台。体部下端から高台内は露胎。見込みは蛇の目剥ぎ釉。釉の色調は一樣ではなく、青緑釉が被熱により変色か、肥前系。	黒色粒	胎土: 2. 5Y6/2 灰黄 外釉: 10Y7/2 灰白 内釉: 7. 5Y5/3 灰オリーブ	良好	17 世紀後半～18 世紀初頭

第 158 号土坑 [第 38 図]

検出位置は 5 区中央部東寄りの C22・C23 グリッドにまたがる。南側の大部分は調査区外に延びる。SK157・159 と重複し、SK157 より新しく、SK159 よりも古い。平面形は不明であるが、断面形は箱状を呈すると思われる。深さは 38cm であるが、平面規模や主軸方向は把握できなかった。覆土は、黒色土・黒褐色土主体のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

時期は、覆土が SK157 と類似することから、17 世紀後半～18 世紀初頭の可能性が考えられる。

第 159 号土坑 [第 38 図]

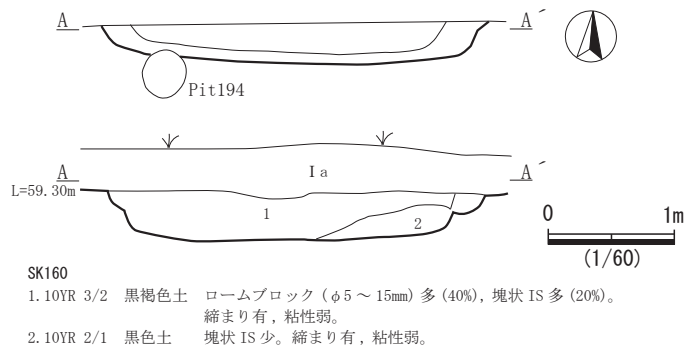
検出位置は 5 区中央部の C22 グリッドである。南側の大部分は調査区外に延びる。SK158 と重複し、本遺構が新しい。平面形は方形とみられ、断面形は箱状を呈すると思われる。深さは 58cm であるが、平面規模や主軸方向は把握できなかった。覆土は、黒色土・黒褐色土主体のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

時期は、覆土が SK149 と類似することから、18 世紀代の可能性が考えられる。

第 160 号土坑 [第 40 図]

検出位置は 5 区中央部西寄りの C21 グリッドである。北側の大部分は調査区外に延びる。Pit194 と重複し、本遺構が古い。平面形は方形とみられ、断面形は箱状を呈する。規模は長軸 305cm、短軸が現存値で 30cm、深さは 37cm を測り、主軸方向は N-85°-E を示す。覆土は、黒色土・黒褐色土主体のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は土師質土器の小破片 1 点のみが出土した。

時期は、覆土が SK149 と類似することから、18 世紀代の可能性が考えられる。

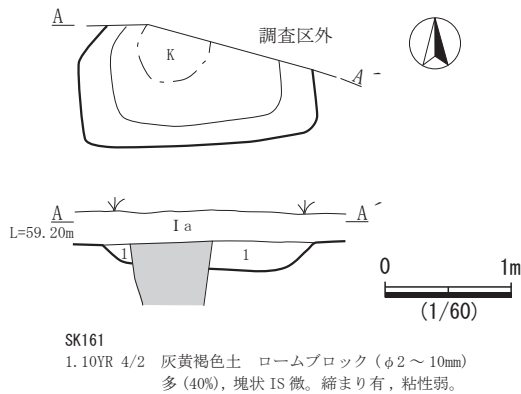


第 40 図 第 160 号土坑

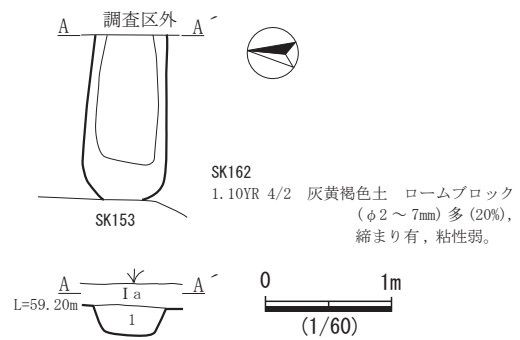
第 161 号土坑 [第 41 図]

検出位置は 5 区東側の C23 グリッドである。北側は調査区外に延び、中央部の一部で攪乱を受けている。重複遺構はない。平面形は方形とみられ、断面形は箱状を呈する。規模は長軸 185cm、短軸が現存値で 98cm、深さは 23cm を測り、主軸方向は N-87°-E を示す。覆土は、灰黄褐色土の単一層で、小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積である。遺物は陶器と土師質土器の小破片各 1 点のみである。

時期は、覆土が SK157 と類似することから、17 世紀後半～18 世紀初頭の可能性が考えられる。



第 41 図 第 161 号土坑



第 42 図 第 162 号土坑

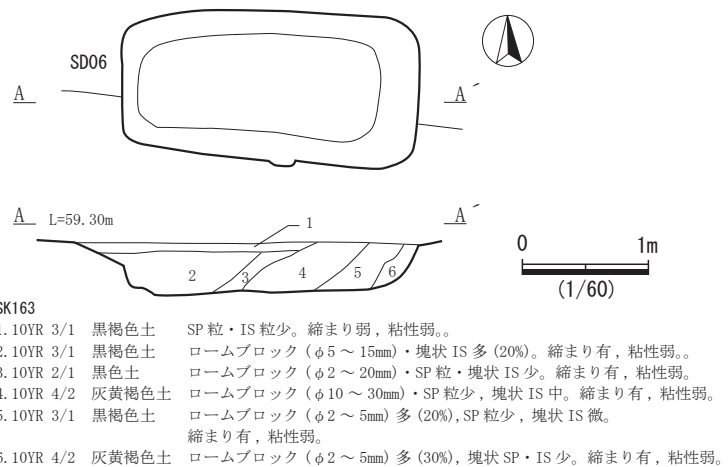
第 162 号土坑 [第 42 図]

検出位置は 5 区東端の C24 グリッドである。東側は調査区外に延びている。重複遺構はない。平面形は長方形で、断面形は箱状を呈する。規模は長軸が現存値で 130cm, 短軸 58~67cm, 深さは 22cm を測り, 主軸方向は N-88°-E を示す。覆土は, 灰黄褐色土の単一層で, 小粒のロームブロックを多量に含む人為堆積である。遺物は出土していない。

時期は, 覆土が SK150・151 と類似することから, 17 世紀末~18 世紀前半の可能性が考えられる。

第 163 号土坑 [第 43 図]

検出位置は 5 区中央部の C21・C22 グリッドにまたがる。SD06 と重複し, 本遺構が古い。平面形は長方形で, 断面形は箱状を呈する。規模は長軸 235cm, 短軸 120cm, 深さは 44cm を測り, 主軸方向は N-88°-W を示す。覆土は, 黒色土・黒褐色土主体のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

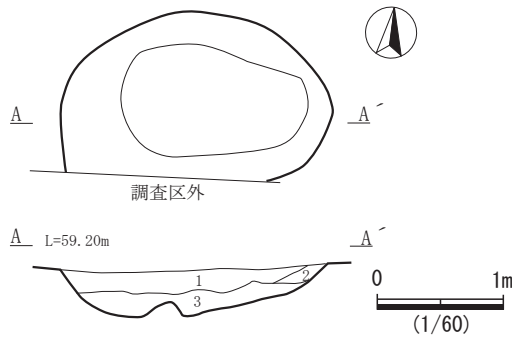


第 43 図 第 163 号土坑

時期は, 覆土が SK149 と類似し, SD06 よりも古いことから, 18 世紀前半の可能性が考えられる。

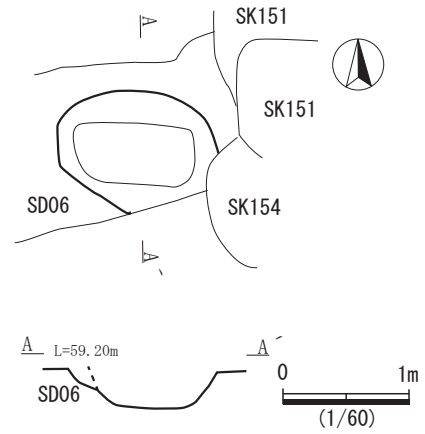
第 175 号土坑 [第 44 図]

検出位置は 4 区東側の B17・18, C17・18 グリッドにまたがる。南側の一部が調査区外に延びる。重複遺構はない。平面形は楕円形で, 断面形は鍋底状を呈する。規模は長軸 216cm, 短軸が現存値で 135cm, 深さ 38cm を測り, 主軸方向は N-70°-E を示す。覆土は, 上層部が黒褐色土主体の自然堆積であるが, 下層はにぶい黄褐色土のロームブロックや塊状の今市スコリアを含む人為堆積で, 縮まりがあることから平坦面を構築した可能性がある。遺物は出土していない。



- SK175
 1. 10YR 3/1 黒褐色土 SP粒微, IS粒少。縮まり・粘性弱。
 2. 10YR 3/2 黒褐色土 ロームブロック(φ2~10mm)・IS粒少。縮まり・粘性弱。
 3. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ5~15mm)密, 塊状IS中。縮まり・粘性有。

第44図 第175号土坑



第45図 第181号土坑

時期は、覆土がSE09と類似することから、17世紀後半～18世紀初頭の可能性が考えられる。

第181号土坑 [第45図]

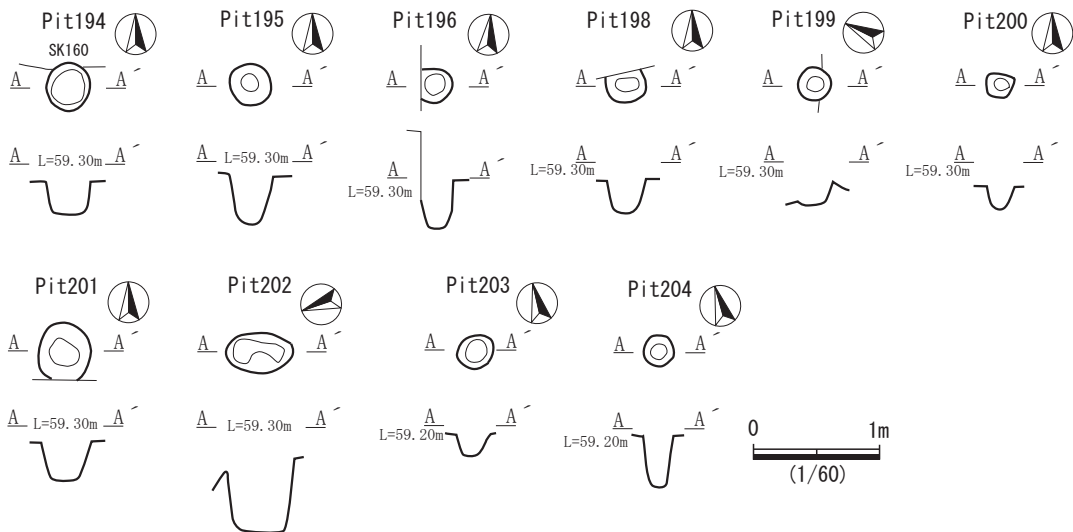
検出位置は5区東側のC23グリッドである。遺構の上部をSD06構築時に削平されている。平面形は長方形で、断面形は箱状であったと思われる。規模は長軸124cm、短軸93cm、溝底面からの深さは15cmを測り、主軸方向はN-86°-Wを示す。覆土の状態は把握できなかった。遺物は出土していない。

時期は、SD06に削平され、形態もSK150～153の形態に類似することから、17世紀末～18世紀前半の可能性が考えられる。

ピット [第46図, 表10]

Pit194～196・198～204が該当し、全て5区内からの確認である。Pit194から器種が判然としないが壺とみられる陶器の体部片が出土したが、それ以外のピットからは遺物は出土していない。覆土は、Pit194と同様の縮まりの弱い黒色土を主体としていることから、近世以降のピットと判断した。

規模等の詳細は一覧表(表10)に記載した。



第46図 第194～196, 198～204号ピット

表 10 ピット一覧表 (近世)

遺構名	位置 (グリッド)	形状	規模 (cm)			重複・覆土・特徴・その他	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ			
Pit194	C21	円	36	35	26	単層。黒色土(10YR2/1)。ローム土と塊状のSP, ISを少量含む。縮り弱, 粘性弱。	陶器・壺瓶類1	
Pit195	C20	円	32	32	36	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒, IS粒少量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit196	C20	円	25	(25)	37	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒中量, IS粒微量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit198	C20	円	30	(24)	29	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒, IS粒微量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit199	C20	円	25	25	18	単層。黒褐色土(10YR3/2)。下層にローム土多量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit200	C20	円	22	19	17	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒, IS粒微量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit201	C21	楕円 (47)	37	33	33	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒, IS粒微量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit202	C22	楕円	53	30	63	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒, IS粒多量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit203	C23	円	26	25	16	単層。黒褐色土(10YR3/1)。SP粒, IS粒多量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	
Pit204	C22	円	26	25	41	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒, IS粒少量, 塊状IS微量含む。縮り弱, 粘性弱。	なし	

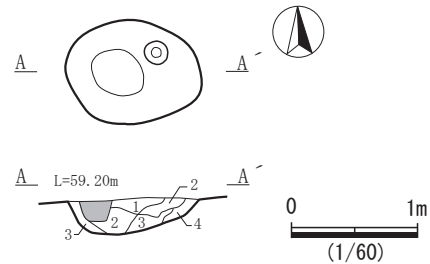
3 時期不明遺構

(1) 土坑・ピット

第 148 号土坑 (第 47 図)

検出位置は5区西端のC20グリッドである。平面形は楕円形で、断面形は鍋底状を呈する。重複遺構はない。規模は長軸110cm、短軸82cm、深さは27cmを測り、主軸方向はN-46°-Wを示す。覆土は黒色土・黒褐色土を主体とした4層に分層され、固く締まる。遺物は出土していない。

時期は不明である。



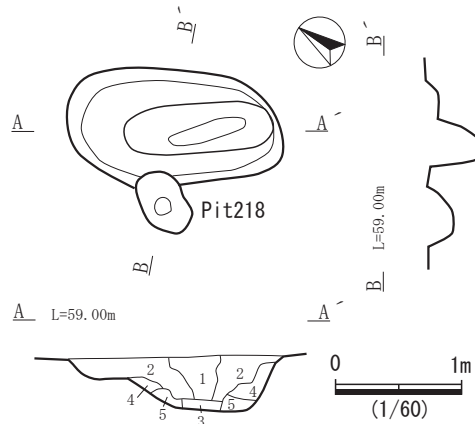
- SK148
1. 10YR 1.7/1 黒色土 SP粒・IS粒微。縮まり強, 粘性なし。
 2. 10YR 3/1 黒褐色土 ローム粒・白色粒少, SP粒・IS微。縮まり強, 粘性なし。
 3. 10YR 3/3 暗褐色土 SP粒少, 塊状IS中。縮まり強, 粘性なし。
 4. 10YR 3/2 黒褐色土 IS混土。縮まり強, 粘性なし。

第 47 図 第 148 号土坑

第 174 号土坑 (第 48 図)

検出位置は4区西側のD5・E5グリッドにまたがっている。平面形は長い楕円形で、断面形は鍋底状を呈する。Pit218と重複するが、新旧関係は把握できなかった。規模は長軸170cm、短軸90cm、深さは44cmを測り、主軸方向はN-31°-Wを示す。覆土は黒色土・黒褐色土を主体とした5層に分層され、固く締まる。遺物は出土していない。

時期は不明である。



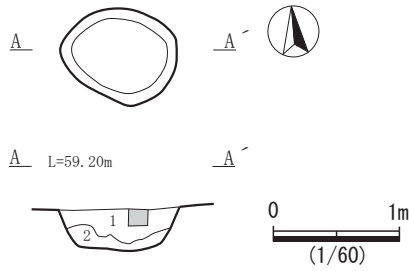
- SK174
1. 10YR 2/1 黒色土 SP粒・IS粒少。縮まり強, 粘性弱。
 2. 10YR 3/1 黒褐色土 SP粒多(20%), IS粒少。縮まり強, 粘性弱。
 3. 10YR 3/2 黒褐色土 ローム粒少, IS粒微。縮まり有, 粘性弱。
 4. 10YR 3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ2~5mm)少。縮まり有, 粘性弱。
 5. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ5~10mm)中。縮まり有, 粘性弱。

第 48 図 第 174 号土坑, 第 218 号ピット

第 176 号土坑 (第 49 図)

検出位置は4区中央部のC10・C11グリッドにまたがっている。平面形は円形で、断面形は鍋底状を呈する。重複遺構はない。規模は長軸93cm、短軸75cm、深さは35cmを測り、主軸方向はN-84°-Wを示す。覆土は黒色土・にぶい黄褐色土の2層に分層され、固く締まる。遺物は出土していない。

時期は不明である。



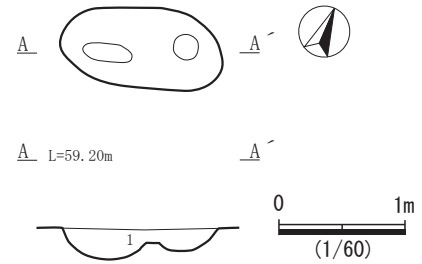
SK176
 1. 10YR 3/2 黒褐色土 SP粒中, IS粒微。締まり強, 粘性弱。
 2. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ5~10mm)中,
 SP粒微, IS粒少。締まり有, 粘性弱。

第49図 第176号土坑

第177号土坑(第50図)

検出位置は4区西側のE4グリッドである。平面形は楕円形で、断面形は不整形となる。重複遺構はない。規模は長軸127cm, 短軸64cm, 深さは23cmを測り, 主軸方向はN-62°-Eを示す。覆土は黒褐色土の単層で, 固く締まる。遺物は出土していない。

時期は不明である。



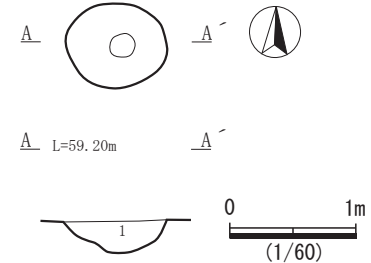
SK177
 1. 10YR 3/1 黒褐色土 SP粒・IS粒微。締まり強, 粘性弱。

第50図 第177号土坑

第178号土坑(第51図)

検出位置は4区西側のE2・E3グリッドにまたがる。平面形は円形で、断面形は半円状を呈する。重複遺構はない。規模は長軸79cm, 短軸67cm, 深さは26cmを測り, 主軸方向はN-87°-Eを示す。覆土は黒褐色土の単層で, 固く締まる。遺物は出土していない。

時期は不明である。



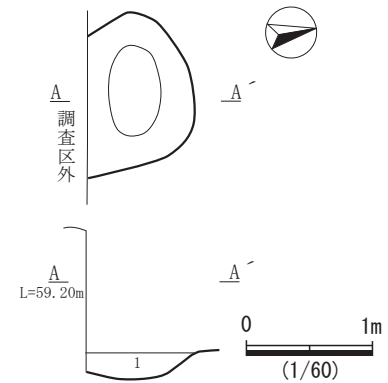
SK178
 1. 10YR 3/1 黒褐色土 SP粒・IS粒少。
 締まり強, 粘性弱。

第51図 第178号土坑

第179号土坑(第52図)

検出位置は4区西側のE3グリッドにまたがり, 南側は調査区外に延びる。平面形は楕円形で、断面形は鍋底状を呈する。重複遺構はない。規模は長軸122cm, 短軸は現存値で86cm, 深さは19cmを測り, 主軸方向はN-78°-Wを示す。覆土は黒褐色土の単層で, 固く締まる。遺物は出土していない。

時期は不明である。



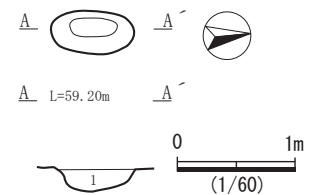
SK179
 1. 10YR 3/2 黒褐色土 SP粒少, 塊状IS微。
締まり強, 粘性弱

第52図 第179号土坑

第180号土坑(第53図)

検出位置は4区西側のE3グリッドにまたがる。平面形は楕円形で、断面形は鍋底状を呈する。重複遺構はない。規模は長軸70cm, 短軸は現存値で35cm, 深さは20cmを測り, 主軸方向はN-3°-Eを示す。覆土は黒褐色土の単層で, 固く締まる。遺物は出土していない。

時期は不明である。



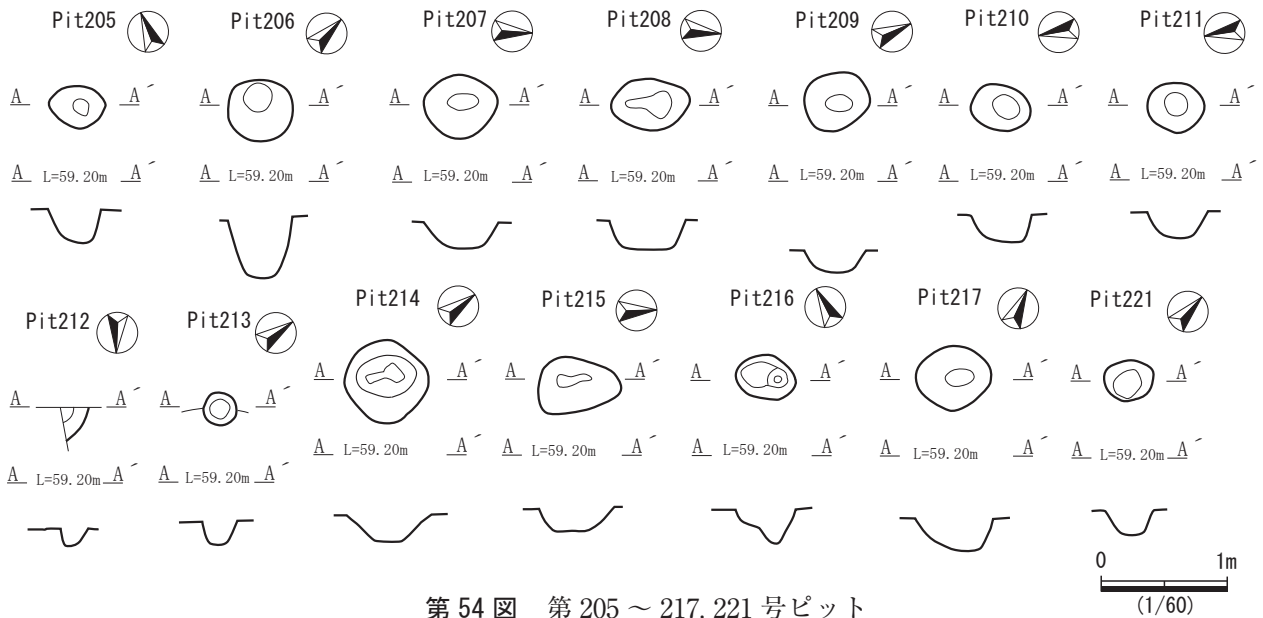
SK180
 1. 10YR 3/2 黒褐色土 SP粒中, 塊状IS少。
締まり強, 粘性弱

第53図 第180号土坑

ピット [第 54 図, 表 11 ※ Pit218 は第 48 図]

時期の判別できなかったピットは 15 基である。覆土は前述した時期不明の土坑と類似し、黒色土・黒褐色土を主体とし、固く締まった土質である。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

規模等の詳細は一覧表 (表 11) に記載した。



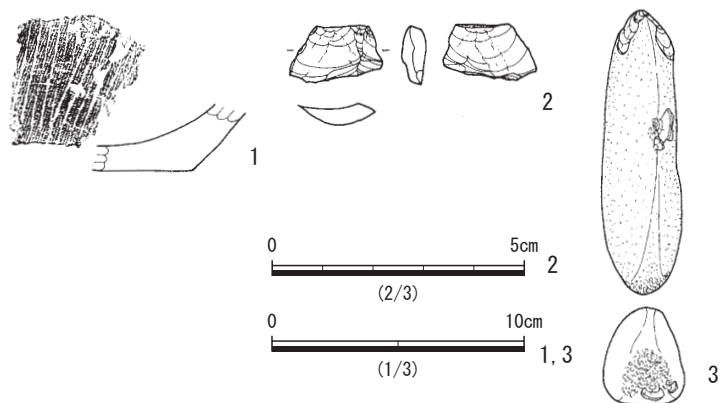
第 54 図 第 205 ~ 217, 221 号ピット

表 11 ピット一覧表 (時期不明)

遺構名	位置 (グリッド)	形状	規模 (cm)			重複・覆土・特徴・その他	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ			
Pit205	C15	楕円	45	33	25	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒, IS粒少量含む。しまり強, 粘性弱。	なし	
Pit206	C14	円	52	52	48	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒, IS粒少量含む。しまり強, 粘性弱。	なし	
Pit207	D10-11	円	56	50	23	単層。黒色土(10YR2/1)。SP粒, IS粒微量含む。しまり強, 粘性弱。	なし	
Pit208	D11	楕円	63	40	23	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。しまり強, 粘性弱。	なし	
Pit209	E5	円	50	44	18	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit210	D10	楕円	50	37	22	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit211	D10	円	44	40	22	単層。黒褐色土(10YR3/1)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit212	D9	(円)	(26)	(22)	13	単層。黒褐色土(10YR3/1)。SP粒少量, 塊状IS少量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit213	D9	円	25	25	19	単層。黒褐色土(10YR3/1)。SP粒少量, 塊状IS微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit214	E5	円	66	66	22	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit215	D7	不整形	64	43	20	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit216	D7	楕円	50	32	28	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit217	D5	円	61	52	25	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit218	D5	楕円	53	35	20	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	
Pit219	欠番 : 植栽痕と判断							
Pit221	D7	円	38	32	20	単層。黒褐色土(10YR3/2)。SP粒微量含む。締り強, 粘性弱。	なし	

4 遺構外出土遺物

採集された遺物の中には、遺構に関連しない遺物が 3 点確認されている (第 55 図・表 12・図版 4)。1 は、4 区表土除去の際に出土した陶器・播鉢の底部片である。胎土から 18 ~ 19 世紀にかけて堺で製産されたものと考えられる。2 はメノウの剥片で、SK156 底部付近から出土した。細片で



第 55 図 遺構外出土遺物

はあるが、わずかに使用痕が確認されている。3は砂岩製の敲き石で、SD06の覆土内から出土したが、流れ込んだ石器とみられる。細長く握りやすい形状で、先端部には明瞭な敲打痕が認められる。

表 12 遺構外出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	備考
遺構外	1	陶器 播鉢	— (2.6) —	体部下端～底部片。外面は全体にヘラケズリ。内面は6本以上の単位で播目。堺産。	白色砂粒、 砂礫(大粒)少	2.5YR4/4にぶい赤褐	良好	1区表採 18世紀～19 世紀代
遺構外	2	石器 剥片		全長:1.2cm 幅:1.8cm 厚さ:0.5cm 重量:0.9g 石材:メノウ わずかに使用痕が認められる。				SK156
遺構外	3	石器 敲石		全長:11.2cm 幅:3.2cm 厚さ:3.8cm 重量:110.2g 石材:砂岩 端部に剝離痕と敲打痕。側面は滑らか。				SD06

表 13 出土遺物集計表 (陶磁器・土器)

種別 器種 出土地点	陶器					磁器		土師質土器				瓦質土器			合計
	碗	皿	播鉢	徳利	壺	碗 (染付)	小杯	坏類	壺・甕類	土鍋類	不明	内耳鍋	火鉢類	香炉	
SK149	1											1			2
SK150							1	1					1		3
SK151	1		1			2				1	1		1		7
SK153				1											1
SK156															0
SK157		1													1
SK160											1				1
SK161					1						1				2
SE09	1	1							4				4		10
SD06	10		1	1		1			6	2	1	1	6	1	30
Pit194					1										1
1区表採			1												1
2区表採					1	1			1	1	1				5
K2(カクラン)								1	1						2
K6(カクラン)													1		1
TP④															0
TP⑤															0
合計	13	2	3	2	3	4	1	2	12	4	5	2	13	1	67

表 14 出土遺物集計表 (土器以外)

種別 器種 出土地点	銅製品	鉄製品	石製品		石器		礫				合計	
	不明	不明	砥石	不明	剥片	敲石	メノウ	砂岩	安山岩	花崗岩		
SK149												0
SK150												0
SK151			2	1								3
SK153												0
SK156						1						1
SK157												0
SK160												0
SK161												0
SE09					1							1
SD06	1		1	1		1	1			1	1	7
1区表採												0
2区表採												0
K2(カクラン)			1				1					2
K6(カクラン)												0
TP④										1		1
TP⑤										1		1
合計	1	1	3	3	1	1	2	2	1	1		16

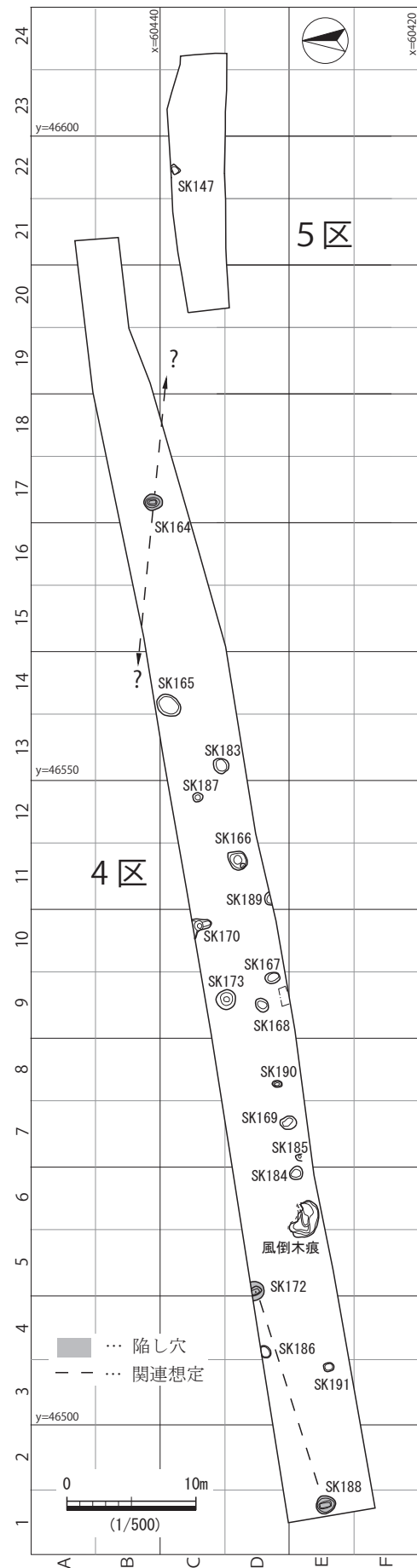
第4節 総括

前節での報告の通り、4区では縄文時代の遺構を主体とし、5区では近世の遺構が集中していることが明らかとなった。

縄文時代の遺構として判断したのは、覆土の上層に七本桜軽石、中層以下に今市スコリアが堆積する土坑群である。その内、陥し穴と判断したのは3基（SK164・172・188）であった。本遺跡西側の沢を挟んだ対岸の台地上でも同様の状況は確認されており、既出の報告書によれば三美中道遺跡で4基、滝ノ上遺跡で14基の合計18基、滝ノ上遺跡で1基が陥し穴として判断されている（青池2015）。中崎遺跡第1次調査では5基が報告されており、1区西部で1基（SK117）、2区で2基（SK63・71）、3区で2基（SK134・142）が確認され（平石2017）、第2次調査の3基を含めて8基となった。以上のように、陥し穴は広範囲で確認されていることから、三美地区は狩猟の場として展開していたことは確実であろう。特に現段階では、中期遺構群が密集する地点で既に壊され消滅していることを考慮する必要もあるだろうが、狩猟場として活動した中心は、中崎遺跡が位置する台地にあったと判断される。

中崎遺跡を含めた三美地区の遺跡群は八溝山地の東側丘陵地に立地するが、同山地西側の茂木町では多数の陥し穴が調査された登谷遺跡が知られている。この標高をさほど有しない山地丘陵地帯に展開された両遺跡から、狩猟場の様相がおぼろげながら見えてくる。

まず陥し穴の時期であるが、三美地区でこれまで確認されてきた陥し穴には遺物が全く出土していないため、覆土の状態から時期を分析した中村博信氏による登谷遺跡の成果（中村2002）を参考に見ていきたい。登谷遺跡の分析と中崎遺跡で確認された陥し穴の状況を照らし合わせたとき、検出面が登谷遺跡の第8層にあたる今市スコリア層上面であること、縄文時代早期の遺物包含層の形成以前に埋没した土壌化された黒土が全く入らない覆土であることから、本次調査で確認された陥し穴の時期は登谷遺跡の1期に相当する縄文時代草創期の所産と判断した。次に遺構



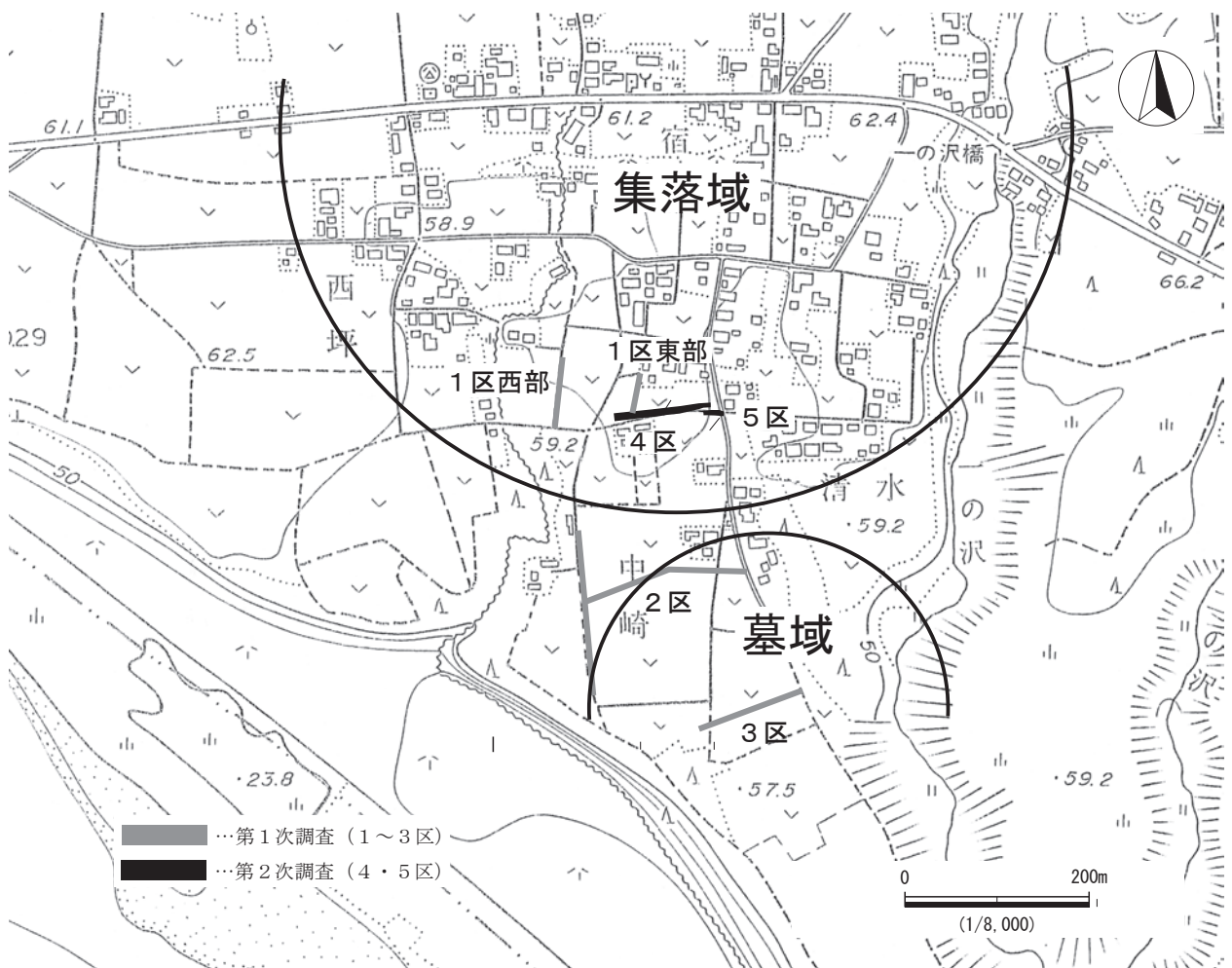
第56図 縄文時代遺構・
風倒木痕配置図

の配置であるが、中崎遺跡の場合は、調査範囲が限定的なため言及することはむずかしい。ただ、登谷遺跡では1期の配置が2基で対を成すように配置されていることから、今回の調査ではSK172とSK188の双方が形態及び主軸方向が類似し、遺構間の距離が16 m程とこれまで確認された中で最も近接するなど、対となる可能性が高いと思われる。その点から考えると、SK164は1基のみの確認であるが、未調査区に関連する遺構が存在することも考えられる（第56図）。

近世の遺構は、第1次調査（1～3区）と同様に、第2次調査（4・5区）でも確認することができた。ただ、前は2区東側で土壙墓が多く確認されているのに対し、今回は重複した土坑を中心に、井戸、溝など5区に集中していることが特徴的である。特に溝を切り込んで土坑SK150～155は、深さに差はあるものの類似した方形・長方形の形態と灰黄褐色土を主体とする覆土で、それぞれが重なり合っ
て掘り込まれている。性格を判断する材料に乏しいが、わずかな出土遺物から、おそらくは集落に近接しながら貯蔵を目的とし、同じ場所で幾度も掘り返し再利用されたのではないかとと思われる。

その出土遺物を見ていくと、近世の江戸時代中期にあたる17世紀末から江戸時代後期の18世紀にかけて生産されたと考えられる陶磁器片が主体である。器種では碗、茶入など茶陶器類が目立ち、山間部における生活様式を見るうえで興味深い。

第1次調査で確認されている土壙墓群は、この5区より南方約200 mの地点に集中して認められる。



第57図 近世生活域・墓域想定図

集落からはやや離れた場所に所在し、集落と墓域の境界が明瞭であったことがうかがえる。一方で、今回の第2次調査地点で得られた生活色の様相を見せる遺構・遺物は集落に伴うものと考えることができ、江戸時代中期から後期にかけての集落と現在の集落との位置を照らし合わせてみると、さほど移動していない可能性が高そうである。

【引用・参考文献】

- 青木紀子ほか 2015 『三美中道遺跡Ⅱ・滝ノ上遺跡Ⅱ』常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第22集
常陸大宮市教育委員会・大成エンジニアリング(株)
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房(株)
- 大宮町教育委員会 1995 『町村合併40周年記念特別展 大宮の考古遺物』
- 小川和博・大淵淳志 2009 『西塙遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会・(有)日考研茨城
- 高野浩之・間宮正光・野村浩史 2013 『赤岩遺跡Ⅱ・三美中道遺跡Ⅰ』常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第15集
常陸大宮市教育委員会
- 辻 弘和・原川雄二 2009 『西塙遺跡』常陸大宮市教育委員会・(株)パスコ
- 中村信博 2002 『登谷遺跡』茂木町埋蔵文化財調査報告書 本田技研工業(株)・登谷遺跡調査団
- 中村信博 2007 「関東地方の陥し穴猟」『縄文時代の考古学5 なりわい—食料生産の技術』(株)同成社
- 中村信博 2015 『寺平遺跡発掘調査報告書Ⅰ』市貝町教育委員会
- 常陸大宮市教育委員会編集・発行 2015 『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財分布地図』
- 平石尚和 2017 『中崎遺跡Ⅰ』常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第31集 常陸大宮市教育委員会
- 三輪孝幸 2012 『赤岩遺跡Ⅰ』常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第11集 常陸大宮市教育委員会
- 湯原勝美・秋山泰利 2011 『岡原遺跡』常陸大宮市教育委員会

写真図版



4区全景（上が北方向）



SK165 全景（南西から）



SK166 全景（東から）



SK167 全景（南から）

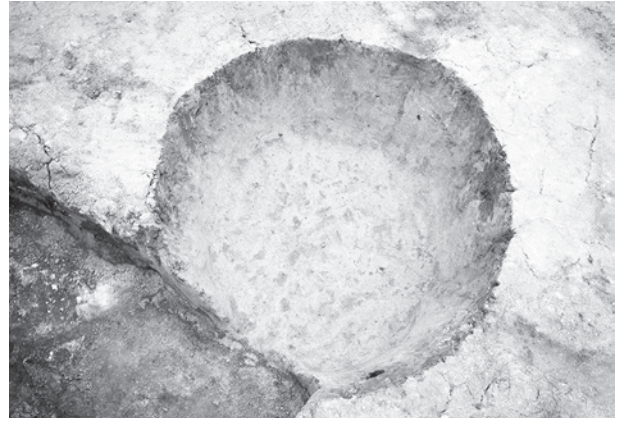


SK169 全景（北から）

図版 2



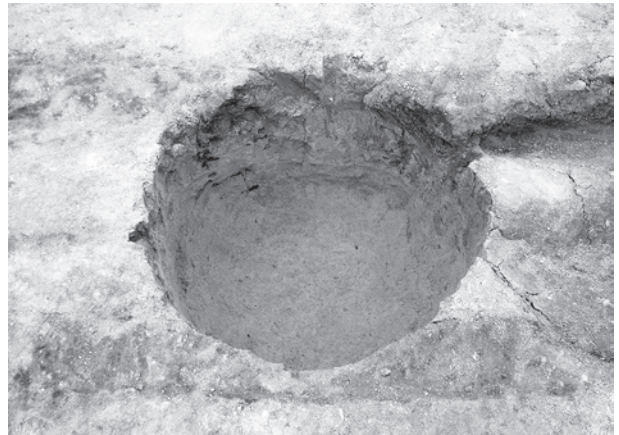
SK173 全景 (東から)



SK183 全景 (北東から)



SK184 全景 (北西から)



SK187 全景 (西から)



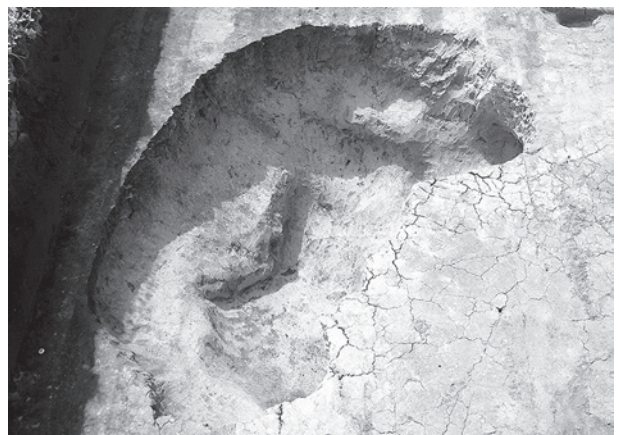
SK189 土層断面 (北から)



SK189 全景 (北東から)



風倒木痕土層断面 (東から)



風倒木痕全景 (東から)



5区全景（上が北方向）



SE06 全景（東から）



SK144 ~ 146・150 ~ 156・161・162 全景（東から）

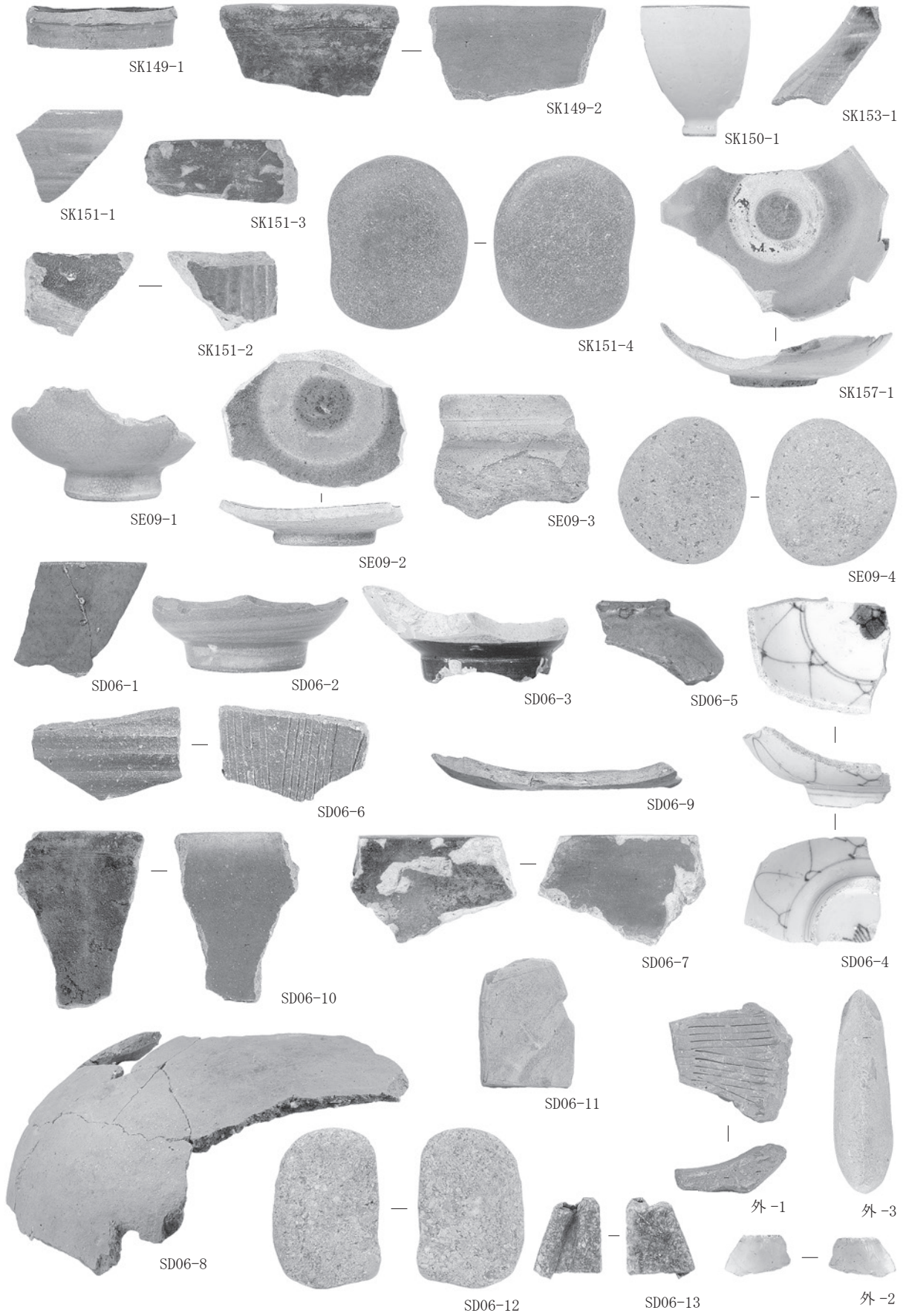


SE08 全景（南西から）



SE09 全景（南から）

图版 4



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかざきいせき に							
書名	中崎遺跡Ⅱ							
副書名	畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 8							
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	中林香澄（常陸大宮市教育委員会） 高野浩之（株式会社地域文化財研究所）							
編集機関	株式会社地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 TEL：0476-42-7820							
発行機関	常陸大宮市教育委員会 〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135-6 TEL：0295-52-1111							
発行年月日	2018年（平成30年）3月10日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
なかざきいせき 中崎遺跡Ⅱ	いばらきけんひたち おおみやし 茨城県常陸大宮市 みよし ほんちほか 三美895番地外	08225	大087	36度 32分 36秒	140度 21分 11秒	2017.08.07 ～ 2017.09.15	772㎡	畑地帯総合整備事業三美地区に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中崎遺跡Ⅱ	狩猟場 その他	縄文時代	陥し穴 3基 土坑 16基 ピット 3基 風倒木痕 1か所	剥片（メノウ製） 敲き石		縄文時代草創期の陥し穴を3基確認した。		
		近世	土坑 20基 井戸跡 2基 溝跡 1条 ピット 10基	陶器（碗，皿，播鉢，德利，壺） 磁器（染付碗，小杯） 土師質土器（かわらけ，壺・甕，土鍋） 瓦質土器（土鍋，火鉢，香炉）				
		時期不明	土坑 7基 ピット 15基	石製品，銅製品，鉄製品				
要約	<p>2016年の第1次調査に継続された中崎遺跡の第2次調査で，縄文時代と近世の複合遺跡となる。縄文時代は，出土遺物がほとんど認められないものの，覆土に七本桜軽石と今市スコリアを多量に含んだ草創期に比定される遺構が中心に確認されている。近世は，17世紀後半から18世紀代にかけての肥前系，瀬戸美濃系陶磁器類を伴う遺構が1か所に集中している。陶磁器類は茶陶器が目立ち，土壇墓を中心とした前回の調査に対して，江戸時代中期以降の上層農民による生活色がうかがわれる。</p>							

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第32集

中崎遺跡Ⅱ

畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査8

平成30(2018)年3月1日 印刷
平成30(2018)年3月10日 発行

編集 株式会社地域文化財研究所
〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9
電話 0476(42)7820

発行 常陸大宮市教育委員会
〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135-6
電話 0295(52)1111

印刷 株式会社ライフ
〒286-0134 千葉県成田市東和田595
電話 0476(24)1564